

波と鳥

第22号

2001



室蘭市医師親交会誌

波ノ鳥

第22号

2001

室蘭市医師親交会誌

目次

表紙
カッター

加藤 治良
加藤 治良

巻頭言

二十一世紀の処方箋 齋藤 修弥 1

随想

エンルム風物誌 集団下校	加藤 治良 2
先端医学会議と古都	大平 整爾 4
老人の仲間入りをして思うこと	松田 幹人 7
わが青春の長町分院	曾根 清孝 8
サナトリウムのクリスマスツリー	堀尾 昌司 9
遠藤孝二郎先生の追憶	鴨井 清一 10
北川正樹先生を偲んで	松田 史明 11
東北大医学部良陵同窓会室蘭支部小史の追加の件	鴨井 清一 12

病院訪問

医療法人社団友愛会 恵愛病院	吉井 大介 14
愛生マタニティークリニック	生田 茂夫 16

いくた内科クリニック	角哲雄	19
------------	-----	----

あんらくいす

ユーフラテス川、旧約聖書、イスラム	上田智夫	22
ミレニアムの修学旅行	鴨井清成	26
遙かなるレインジローバー	齊藤甲斐之助	27
第三十五回北海道ドクターズゴルフ大会に参加して	鴨井清貴	30
平成十三年度室蘭市医師会モータリストクラブドライブ会	鴨井清貴	32
輪西雑感	福永純	35
Rioの女	藤兼正明	38

新会員・自己紹介

井上慶俊・宮町敬吉		39
-----------	--	----

近況報告

編集室へのお便り

親交会の主な行事		46
会員異動		47

編集後記

開田博之		48
------	--	----

二十一世紀の処方箋

室蘭市医師親交会会長 斎藤修弥

喧伝された小泉内閣の「改革」は参議院選挙を終えた今、胸突き八丁にかかっている。経済の厳しさを増しており、改革の痛みは現実のものとなるからである。国民の圧倒的な支持は、政治や経済の停滞を打開する根本からの見直しが必要とするものであり、新しいビジョンを求めている投票であったとおもわれる。であるならば、社会がこれほど不活性化し、家族や共同体の絆が切れ、生きる目標の喪失による凶悪犯罪や品性の劣化がまん延した根本の原因に、メスを入れる勇氣と知恵が必要であろう。

現実には、二十世紀型の拡大による問題解決の処方箋では、到底及ばない壁に突き当たっている。そう考えると、私たちに必要なのは、避けられない試練を自己革新のきっかけとして生かす力ではないだろうか。原因を他に求めるのではなく、改革の主導権を自らに取り戻すのである。

戦後のゼロからの出発という困難は、経済力の復興で切り抜けたが、物の豊かさの中で起きた現代の危機には、これまで省みることのなかった「人間の内的な力」の解放が決め手になるのではないか。それは自分の人生を振り返ってみれば分かる。試練があったからこそ、その都度新しい自分に変化出来たのだと思う。

人間の可能性を信じ、共に痛みを背負う勇氣と情熱が、個人の人生を切り拓くにも、国家の危機を乗り越えるためにも求められている。その決意を現実の場で実践していくことが、二十一世紀の処方箋であろう。

随想

エンルム風物誌

集団下校

加藤 治 良

(加藤内科医院)

暦の上では寒明け。それに合わせたような穏やかな空模様が二、三日続いていたが、シバレはまだまだ。

店の倉庫に町の間屋から米や炭を運んで来る馬の長いマツゲは、銀色の針のように光っていた。

その日の二時間目、月形先生は黒板に平仮名を十ほど書いて「漢字になおすんだが、二種類の漢字になるのもあるから、よく考えて」鼻水をすする音、軽い咳きばらい……。

不意に、全く不意に、どどどどと空が鳴った。東側の窓がガタガタと大きな音を立て、教室がすーっと暗くなる。

「おーっ、何だこりゃ。すごいナ！」

シャシャシャと窓ガラスに雪が吹き付け、又、空が鳴る。

「職員室に行ってくる。今朝、舟を出した家は？」

湯浅のハッコと守川のヒロシが手を挙げた。うなずいた先生は急ぎ足で廊下に出る。校舎全体が揺らいだと思った。

「はい、授業はこれで終わり。今日は集団下校になる。明日はおさまるらしいが、測候所もびっくりしてたそうだよ。こんな突然の急変なんて物語の世界にはあるけどね。守川と湯浅は先

に帰りなさい。父さんもう家にいるさ。天候の変わりを見るのは漁師の方が測候所より確かだから大丈夫」

月形先生の言う通りだと、じろうも思う。でも今日みたいな不意打の時化の予測までは無理だよな。東側の窓ガラスの一枚一枚が習字半紙を貼ったように真っ白になっていく。

並の吹雪ならば半島の先端に育って来たじろう達は慣れっこになっている。エトモの坂で櫓すべりもやれば、ナベシマ山にスキーをかついでも行く。風の緩急に合わせた呼吸の仕方もあると身についてくる。一岬向こうのエトモの連中や片側が広い埋め立ての原っぱの街道を歩くオハシナイの連中は、雨風雪の日は一年生、二年生を包むようにして登下校するのが当前のことになっている。この六年間、集団下校などという改まった言い方は一度も使われていない。だが、今日は特別なんだ。

三〇分を過ぎたところ風の勢いは半分ほどになった。玄関前の廊下から教頭先生が大きな声で

「エトモの人達は山道を回って行くこと。岬の道は駄目です。オハシナイ組は埋め立てからの斜め向かい風を十分計算するよ。うに。父兄の方も何人か見えてますが、高等科と六年の諸君、しっかり頼みます。それから一年と二年生は、列の中から外に出たらダメですよ。絶対離れないで。いいね」「ハイ」

「ちび達、はしゃいでるみたいだ」大崎の昭二が横で笑った。

玄関の前に一尺ほどの吹きだまりが出来ている。じろうは店から入った。雨戸を半分以上引いているから電灯がついていても薄暗い。造船所の高木さんと漁師の鮫島のおやじさんが小さ

な声で話していたが、二人の表情に何かあったなと、じろうは茶の間に上がらずに帳場の横で耳をすましていた。すぐ後から築港の北勢丸の船長も入って来た。「みんな、戻ったかネ」

「それがな船長、四人は戻ったんだが……」

「戻っていないのは誰だ。もう二時間にもなるというのに」
「守川の舟なんだ」もりかわ！じろうはドキツとした。

「この大將も、さつき守川の所に行つた。駐在と一緒に」
このとき電話のベルが鳴つた。鯨島のおやじさんが出る。

「何だつて？舟が見つかった？——うん、うん、そうかい」

受話器をガチャンと掛けて、顔色は冴えない。

「消防番屋からだ。エトモの権藤さんからの電話で、エビス島の岩場に磯舟が引つかかっている、舟だけで人は見えない。守川の舟かどうかはまだ判らんそうだが……」

じろうの眼の前をヒロシの顔がよぎる。

二日たち三日たち一〇日を過ぎても、エトモの海はヒロシ達に父親を返そうとはしなかった。

午前の最後の授業が終わりに近づいたころ、先生が、皆そのまま待つていなさい、と言つて廊下に出たが、すぐ戻つて来た。先生のうしろにヒロシが居た。

「今度のこと、守川君に何と言つたらいいのか、先生には言葉が出て来ないんです。強くなつてほしい、と祈るだけです。」

あと一週間もすればヒロシ君は、登別の近くのランボツケでやはり漁師をしている叔父さんの処に行くんだそうです。卒業式には出ます。そうだね？」ヒロシがうなずく。

「守川さん、元気だね」糸井スマコも続いて、ヒロシ、ヒロシ

と呼びかける声だけで又シユンとなった。平山のヨリオが立ち上がつて「ヒロシ、負けるなよ」と叫ぶように言った。

じろうはそのとき或ることを考えていた。

「帰る前に職員室に寄りなさい」と言つて先生が廊下に消えてからも教壇の上に立つたままのヒロシが、

「俺は大丈夫だ。おふくろと妹のトシエのこと、よろしく頼む。まだ当分はこつちに住んでるんだ」大人びた口調だった。

「ときどき来るからナ」手を挙げて教室を出るヒロシをじろうが追う。「渡すものがあるんだ。明日でも来いよ」「何だ」

「あの本だ。十五年漂流記だ」「本当か、じろう」

じろうから借りて何日も何日も読み返し読みふけり、ろくに夜も寝てないと小母さんがこぼしていた本。夏休みが終わつてからも顔をあわせる度に語り合い楽しんだ物語。

いまのヒロシに一番ふさわしい贈り物だと、じろうは思ったのだった。

画用紙の右に築港のボンズ山を描く。赤と白の灯台を描く。

下四分の一に渚の線を引き、舟も人も、誰もいない浜辺。

左の沖合に大黒島が浮かぶ。遠くに霞む有珠の山。

白い空に四行を書き入れた。

おれたちが遊んだ浜

おれたちが喧嘩した浜

おれたちを育てた浜

おれたちの砂浜

『十五年漂流記』の表紙裏に絵をはさんで、机の上に静かに置いた。負けるなよ、ヒロシ。
(終わり)

先端医学会議と古都

大 平 整 爾

(日鋼記念病院)

あおによし／奈良の都は／咲く花の／

匂うがごとく／今盛りなり

ゆく秋の／大和の国の／薬師寺の／

塔の上なる／ひとひらの雲 (佐々木信綱)

大阪市立大学医学部内科の西沢良記教授が、“The Second International Congress on Uremia research—Pathogenesis, Progression and Complication of Chronic Renal Failure”(国際尿毒症会議)を四月二十一～二十三日の会期で奈良において主宰された。一つのセッションの座長を要請されて久しぶりに奈良を訪問できることを喜びながらも、気の重いことでもあった。抄録集を予め読んでみると、“uremia research”と学会名にあること、臨床に結びついてはいるが極めて基礎医学的な色彩が強い内容の多いのである。

私の担当したセッションは最近話題のAGEs (Advanced Glycation Endproducts)と糖化蛋白の代謝に関する分野の発表で、学会前の三カ月程、関連論文を読み続けて格闘する始末だった。腎不全状態では酸化ストレスの亢進から、糖・脂質などが反応性の高いカルボニル構造に変化しアミノ基を修飾して

AGE化形成が促進されるというのが、今日の見解であるらしい。AGEsの蓄積が、種々の具体的な臨床症状に結び付くことも知られて来ている。

と、まあ、こういった発表の交通整理が期待される大いに気の重い役向きを仰せ付かった次第なのだが、「奈良へ行く」というこの事実が女房殿が飛びついてきて、彼の地へ同行することになった。学会当日の二十六・二十七日は単独行動を取ってもらい、学会終了後の二十八日(土)と二十九日(日)はお付き合いですという約束である。いつもいつも、留守番役を願っている身の些かの罪滅ぼしである。

さて、会場となった奈良県立公会堂はそう大きな建造物ではないが、東大寺にはほど近く位置し、全体がすっぱりと美しい緑に囲まれ古都奈良によく調和し、周辺の雰囲気を少しも損じていない。

Co-chairmanのアメリカ人医師の名前がDr.Smorgorzewski何やら発音にくいし記憶しづらい。スモーゴウゼウスキーとそのままだに発音してみたら別に何も言われなかったもので、これで通すことにした。このドクターとセッションの開始前に一通りの打合せを行い役割分担を定めて、まずは一安心である。出席者は国内外で二百名程の比較的小さな会合であり、そのためかアット・ホームな雰囲気にはあるのだが厳しい質疑応答の応酬もあって討議が盛り上がったのは嬉しかった。ドイツ人の大御所Dr.Heidlandから、「見事な司会だった」とお褒めの言葉を頂戴してセッションが無事終了。Dr.Sと握手を交わして任務完了である。最先端の知識を仕入れて頭が火照って高揚した気持ちのまま外に出ると、太陽は西に傾きつつあり辺りは暮れなず

まんとする時刻であった。一人奈良のあちこちを観光タクシーで見廻った女房殿が、出口で待ち受けてくれた。会長小宴までにやや時間がある。公会堂から程近い所に東大寺があるという家内の言に従って、「奈良の大仏さん」で親しまれ世界遺産になった仏教文化の宝庫と目される東大寺を訪れた。つい今しがたまで先端的な医学討論をしていた身が、およそ千三百年前の古寺と見（まみ）えるこの感情は真に摩訶不思議である。案内書なら「壮大な伽藍に天平の遺香が漂う」とでも、表現するのであろうか。高等学校の修学旅行で初めて見た東大寺はその後四十代と五十代に一度ずつ訪れているのだが、六十歳を超えた年代になると新たな発見・感慨があり極めて厳肅な気持ちになる。この気持ちはその後訪れたいずれの神社仏閣においても同様であり、家内も同じ気持ちのようであった。南大門に忿怒の氣を漲らせて待ちかまえた大仏を守っている一対の金剛力士像阿形・吽形が、圧倒的な迫力で我々に迫りくる。思わず身の引き締まる感じである。大仏殿に入ると大仏さまの大きさにいつものごとくに驚くのだが、金剛力士像を見た直後だけに大仏さまの穏やかで慈悲に溢れる顔を仰ぎ見るとほっとして心の洗われる思いであった。この大仏さまは別名が「盧舎那仏」であり、知恵と慈悲の光明をあまねく照らし出す仏の意という。仏の知恵と慈悲、これ等を仏の教えそのものの中に感じ見出すのが本来なのであろうが、凡人の身には具象的な像を見て感じるのだった。

ひろさちやという方が書いておられる。

「・・・われわれ現代人は、おかしい常識を持たされている。仏というのは、インドの釈迦が出家して修業し、そして悟

りを開いて仏になったのだ、と。だが、その考え方は小乗仏教である。日本の仏教は大乗仏教であって、大乗仏教ではそんな考え方をしない。大乗仏教では、仏とは宇宙そのものである。宇宙全体が仏なのだ。したがって、われわれの目には見えない存在である。その宇宙仏をシンボリックに造像したものが大仏である。だから、大仏は「大仏」でなければならぬ。・・・」

仏は宇宙とは壮大かつ遠大なことで、そうかなと思う。大乗は利他中心の立場をとるが、西欧の *altruism*（愛他主義）にかなってから通じるものと思ってきた。さて、わが家は法然を宗祖とし、自力教を排して他力念仏によって極楽浄土に往生することを目的とする浄土宗の門下である。一個人の小さな力に気づくと、他力念仏の心境へ自然と赴く。

日々、老病生死に接さざるを得ない医療人ではなくとも、歳を経て次第に宗教を考えるに至る。少なくともわれわれは医療界に身を置いて「科学的な」見地から日常診療を行っているが、この科学が御しきれない別の世界があるやに感じているのではあるまいか。

神社仏閣を芸術作品としてのみ見る年代も私にはあったが、今、別の感慨でこれ等に接している自らに気づくのである。

おほらかに／もろてのゆびを／ひらかせて

／おほきほとけは／あま（天）たらしたり

（会津 八一）

学会を終えて、古女房と興福寺・薬師寺・法隆寺・平城京跡などを訪れた。多くの国宝・重要文化財に指定されてる仏像に接したのだが、仏像に如来・菩薩・明王・天と四つの種類があることに気が付いた。

如来 最高の境地に達した存在が如来であり、仏の尊称ともいう。髪型螺旋（らほつ）という縮れ毛で、衣服は一枚の衲衣（のうえ）と下半身には裙（くん）をまとうのみで、装飾は身につけないまことにシンプルなお姿である。仏教の成立当時は釈迦像だけであったが、前出の大乗仏教の成立以来、その他の如来像が登場している。

菩薩 如来となることを目標に修行に励む存在が菩薩である。髪は高く結い上げ冠や飾りを装備し、長いスカートのような裙をまとう。華やかな姿が近代的にすら見えるお姿である。

明王 如来の命を受け、教えに従わないものを調伏・救済する仏である。髪を逆立て忿怒の形相をしているが、その中に自愛の心を宿すという。菩薩と同様な服装であるが、役目柄、武器を手にする勇ましいお姿となる。

天（天王） 明王と同様に如来や菩薩の守護役として、仏法を守る役割を持つ。敵と戦うために武器を持ち甲冑に身を固める。武将に近いお姿である。

われわれに馴染みの「観音さま」の観音は正式には観世音のこと、菩薩さまの一種であり、観世音菩薩と称せられるものである。

これらが分かって、百済観音・観音菩薩・救世観音・釈迦如来・日光菩薩・月光菩薩・増長天・持国天・四天王などを見ると、それぞれの存在価値・役向きが理解できて興味が一層募る。仏は悟りを得た者の謂というから、可能性は極く極く低いにせよ吾人が仏と得るわけである。唯一の絶対神しか存在しないキリスト教との大きな隔たりなのであろう。

千年の歴史を経た多くの仏像に会い見ると、久遠の奈良の

都に夢遊ぶ思いである。

さて、六月の末に金沢へ講演で出向いた折りに、福井の永平寺に立ち寄る機会を得た。

折悪く梅雨時で金沢市から永平寺へ向かう間中、雨は激しく降りしきっていた。

幸い永平寺に近付くにつれて雨も小降りになり、この名高い寺をすつぱりと雨霧が覆っていた。山門を入ると、樹齢七百年といわれる見事に高い老杉の木が霧の衣を纏いながら私を迎えてくれた。真に幻想的な光景で、静寂な霊域へ足を踏み入れる思いであった。

およそ七五十年前（寛元二年…一二四四年）、道元禪師によって開創されたというから歴史ある名刹であり、私には毎年大晦日に除夜の鐘を聞かせてくれる永平寺である。木々に埋もれる山腹に建てられたこの寺を引き合いに出したのは、古都奈良の諸寺との違いに思い当たったからである。東大寺は仏像・建造物をはじめ絵画・典籍・工芸品に至るまで国宝二十九件、重要文化財百二十一件を誇っているが、永平寺は歴史の割りにこれ等は少ないらしい。

冬季、雪も多く度々建造物の補修がなされたごとくである。永平寺では二百名を超える修行僧が仏に仕え現に修行中であり、今も寺として機能していることを知ると、その存在価値は奈良の古寺とは自ずと別なところにあると思えるのである。今の日本に二百余名の若い修行者がいることが極めて貴重に思えるのである。僧堂 別名、雲堂とか選仏場と呼ばれる場所ではこれ等修行僧の修行の根本となる堂で、座禅・打眠・食事の場となると聞いた。間違つて入室しようとして、押し止どめられて

しまった。決して住環境として快適とは見えなかったが、如何なものなのだろうか。俗人の心配など、無用なのかもしれない。

古都奈良に見た名高い寺々―その全てに日本の歴史を感じ心の古里に立ち返った感傷的気持ちとなったのは、この世がここから浄土へと繋がっていて、だから、亡き次男坊と接触できるような感慨を持ったからである。

そして、この気持ちには、鬱蒼とした高い木立に囲まれて多くの修行僧が修行し悩み多かるう老若男女が入り乱れる、言わば現世に生きる永平寺に立ち寄る機会を得て一層、強まったことである。

老人の仲間入りをして思うこと

松田 幹人

(松田内科クリニク)

今年(平成十三年)四月に六十五歳になった。つまり老人の仲間入りをしたわけである。老人の仲間入りをしたからといって私の生活に特別な変化はないのだが、変ったことといえば今

年から年金が支給されるようになり、社会的にも老人の認知を受けたということくらいである。

子供の頃から私の中で培われてきた老人のイメージは、あまり芳しいものではなかった。それは顔が皺だらけで腰がすっきり曲がって、殆ど外出せず、半眠状態で一日を過ごしている老人の姿であった。最近では六十五歳以上といわれる人達の多くが活動的であり、昔の私のイメージの中にあつた老人とは違つた人達が多いようである。私自身この六十五歳という年になって老人になつたという自覚は殆どなく、唯人生の一つの通過点に差し掛かつたくらいの意識しかない。とは言つても、時々老いを自覚する瞬間はある。例えば自分を写した写真を見ると、白髪が多くなつた頭部や老人斑が目立ち始めた顔が写し出されているのを見ると、実際には自分が考えている以上に年老いている現実を知らされる。また、疲労が以前のように回復せず、時間がかかるようになった。

最近高齢化社会の進行につれ、いかにして老後の生活を有意義に過ごすかについて関心が高まっているが、Quality of lifeにもいろんな段階があつて健康でさえあればある程度充実した生活を送ることができると、六十五歳以上という年齢は何が起つても不思議はないので予定通りには行かないであろう。更に年を重ねると思うように体が動かなくなり、時には寝たきりになつて生きている意義が次第に失われてくるが、それはそれなりに少しでもQuality of lifeを維持することが現在の介護保険の目標のようである。老人の仲間入りをした今、このような事実もふまえてこの機会にこれからの自分の人生についてじっくり考えてみようと思つている。

欧米では引退後の人生の青写真を目標に若い頃からそれに向かって準備をし、そしてできるだけ early retirement をすることが人生の幸せと考えている人が多いようである。われわれ大部分の開業医がそうであるように多額の借金を背負って病院を開業し、税金と借金返済のために延々と働かなければならない我々にとって、早期に退職して悠々自適の人生を楽しむことなどできることではない。せめて仕事一途の生活に区切りを付けて、少しでも余裕のある生活を送りたいものである。

老後の人生をいかに過ごすかはそれまでの長い間の生活のあり方が反映されるので、急には生き方を変えることはできないであろう。普段から心の通う良い友人を持ち、妻との密接な人間関係を害わないことが必要であろう。

老年期の人生は決して予定通りにうまくゆくものではないことは多くの先達の例が示す通りである。このように考えると、これからは長期の人生の計画を立てるより一日一日を有意義に過ごすことを考えた方が良いと思うが、どうであろうか。いずれは体力や知力が衰え、何らかの病魔にも冒される時が来るものと思うが、脳卒中などで長患いをし、痴呆も加わって介護保険のお世話になり、家族や社会に多大な迷惑をかけることだけはしたくないと思うのだが、これも希望通りにはゆかないのが人生である。せめて誰かが言ったように「びんびんころり」と人生の終りを迎えたいものである。

吾が青春の長町分院

曾根清孝

(曾根医院)

今ペンを持つて長町時代の思い出を書こうとすると一ぺんに色々な事が浮かんで来てどれから書こうと迷ってしまう。

復員して古川に昭和二十一年一月に帰り、少し休養してから、三月に東北大学の皮膚科を訪れ、伊藤教授に会い入局させて貰ったが経済事情のため早く実技を身につけたい旨を申し出ると塚田助教に手柄をあずけられ長町勤務となったのである。

毎日、がたがた電車での長町通いであったがよく本院の皮膚科医局の裏にあった、ボイラー室の前より先生方、看護婦も一緒にトラックに乗って、春の朝風をきって通ったこともあった。

私は朝一度皮膚科医局に顔を出し、塚田先生あつかいの入院患者をみてから長町に行き午後は又、本院の医局に帰って勉強するのであるが、研究テーマがあるわけでもなし、気楽な日々であった。

一人住まいの下宿に帰ってもしょうがなく、仕事をやっている諸先生方と同じように夜遅く迄医局に残って、あのローソク送電の暗い、寒い医局で、毛布をかむって夜を明かしたことも再々であった。

あの頃の長町分院は麦島の中にあり、毎日がピクニック気分

で診療してました。

先生とプレとの間も今の如くすぎすせず和氣満々でした。

菊地先生、プレの斉藤さん、稲葉さん、大石さん、薬局長の清野さん、婦長さん、事務の大山さん等々が思ひ出されます。

物資の無い時代で、患者より芋や米を貰ひ、外来の煮沸器で芋を蒸かしたのはいい、が、内の水が無くなり、煮沸器を壊して、塚田先生に大目玉を貰ったり、患者より貰ったどぶろくに酔っぱらって、二階に行く正面階段の踊場の壁に落書を大書したり、又、秋保の温泉にプレを連れて、それこそ、鍋、釜、炭迄持参して花見に行き、混浴の風呂で長湯してぶったおれたり、それこそ、楽しい青春でした。円形脱毛の美人の患者さんと親しくなり、よく遊びに行ったものでした。

又、冬にプレを連れて、秋保電鉄に乗り、赤石の奥迄リュックを背負って雪晴の路を、炭の買い出しに行ったのも、懐かしい思い出である。勉強の思い出よりも青春の一齣の思い出の方が鮮麗に思い出されるのである。

今も隣の外科の天野さん、皮膚科の菊地先生や、稲葉さん、美人の患者さんとは年一度の文通をしている。

長男がもう二十六才になり、あの頃の私と同じ年令である。今年慶応の医学部を卒業し、五月の国家試験にも合格して、形成外科に残るそうである。

あの、のどかな長町時代のような平和な雰囲気は、今の医局にはもう無いのではなからうか。

昔の友人は皆懐かしいものである。と思うのは老化現象のあらわれであらうか。

先日の連休には、取り壊される長町分院を愛しんで、わざわざ

で飛行機に乗り、長町分院を訪れ、一人無断で中に入り、昔の皮膚科のあとや、医局を見て廻り、二階の医局のドアをノックもせずに開けると、女の人が居て、何の用ですか、と詰問され、どぎまぎしてわけを話して帰ってきました。

長町分院に關係のある、過去、現在の皆々様永い間、御苦労さんでした。

益々健康に留意して頑張つて下さい。

サナトリウムのクリスマスツリー

堀 尾 昌 司

(堀尾医院)

このエピソードは、私が旭川医大に入学した折に、平成十二年に他界した父が自分の旭川での想い出話として珍しく語ってくれたものです。父の死と共に消し去ってはいけない小さな、でも大切な灯火のような気がしたので、二十八年前の記憶を辿りながら文章として残すことにしました。

戦争の傷痕もいまださめやらぬ昭和二十年代なかば、旭川の近文という所に結核療養所がありました。当時、結核はまだ死の病として恐れられていた時代でした。そこには医学部を卒業

したばかりの若き日の父が先輩達に混じって働いていました。そんな父の受け持ち患者さんの中に一人の少女がおりました。彼女の病状は樂觀を許さないものでした。雪が大雪山系を白く染め始めた頃、病室での父との雑談の中で彼女は何気なくつぶやきました。「先生、私ね、死ぬ前に一度でいいからクリスマスツリーというものを見てみたいの。」

それからしばらくの時が経ち、クリスマスも迫ったある週末、父は当時まだ珍しかったスキーを背負い、腰にはナタをぶら下げて、近くにある嵐山への道を歩んでいました。麓につくなりスキーをはき両手でストックを突きながら山を登り始めました。しかし、嵐山の急峻な斜面と、その頃既に深く降り積もっていた雪にはばまれて、奮闘も虚しくついにツリーとして飾れそうな木を手に入れる事は出来ませんでした。

失意の内に家路を辿っていた父の前にひとつの製材工場が見えてきました。工場の敷地を囲むように、形の良い松の木々がたくさん植えられていました。無意識の内に彼は立ち止まり、その見事さに見入っていました。そんな様子を不審に思った製材所の所長さんが事務所から出てきました。「先生、こんなところでどうしたのさ？」

話を聞いた所長さんは、父からナタを受け取ると、手頃な松の木を一本切り取ってだまって渡してくれました。父は所長さんに何度も何度も頭を下げました。その木には療養所の職員達によって心ばかりの、でも愛情をいっぱい込めた装飾が施され、クリスマスイブの夜に、少女のベッドから見える位置に飾られました。クリスマスツリーは暗い療養所のなかでランプもないのに窓からの雪明かりに映えて輝いて見えました。

翌年の辞令により、父は札幌に転勤となりました。その後少女がどんな運命を辿って行ったのかを私が問うた時、父は「わからない。」と答えました。知っていたのかも知れません。言いたくなかったのかも知れません。でも、私はそんな父を誇りに思っています。患者さんの病気だけではなく、人格そのものに対して深い理解を示しながら日々の診療に取り組んでいた父を。その姿勢を平成十一年十二月十二日の朝に診察室に向かうとして力尽き倒れこむまで生涯に亘って貫いた父を。

今、父が途中までを語ってくれたこのお話のエピローグを私は自分なりに思い描いています。彼女はその後きつと病を克服し、今はお孫さん達に囲まれて、きれいなランプが明滅するクリスマスツリーを毎年眺めているだろうと。そして、その度にサナトリウムで見た初めてのツリーの美しさと、自分と共に病と闘ってくれたひたむきな医師の面影を思い出してくれているであろうと。

遠藤孝二郎先生の追憶

鴨井 清 一

(鴨井整形外科医院)

約五十六余年の昔を追憶するに、岩手県出身、東北帝大医学専門部、昭和十八年卒業後、市立室蘭病院内科に奉職、昭和十九年応召陸軍軍医少尉として北支中支を転戦して昭和二十年帰還して、同病院内科に復職。当時副院長柘植重夫先生の薫陶

をうけられて、八年間勤務され、当時同院外科奉職中の筆者も、昭和二十年より四年間、交情を深くした者で、先生には昭和二十六年三月に、市内母恋南町に開業されて、爾来、温厚篤実、実直な人柄にて、町民の敬愛をうけ、日々の診療に多忙を極め、昭和三十二年に、御前水中学校医、昭和五十六年より室蘭言泉学園理事も共にし、四十有余年にわたりつとめられ、そして室蘭市医師会モータリスト会の常任幹事として、創立以来、数拾年にわたり活躍され、会のドライブには、常に先導車をつとめられた先生のお姿が、思ひ出されてなりません。また、禅宗臨濟宗、護国寺檀信徒の総代として永年にわたり寺門興隆に奉仕されたのであります。

そして、地域社会、医療等の貢献により、昭和五十二年室蘭市教育委員会表彰、昭和五十七年に北海道学校保健功労者表彰と、室蘭市政功労者表彰。平成三年、四年、北海道医師会、室蘭市医師会表彰をうけられたのであります。晩年の先生は、体調をくずされ、老衰も加わり、平成十一年三月、医院を廃院し、子息の居られる札幌にて入院療養加療に努められて参りましたが、平成十三年五月二十一日、幽明界を異するに至り、享年八十一歳の晩春の事でありました。以上、半世紀余にわたり御厚情を賜り、思ひ出は、尽きる事なく続いておりますが、これにて筆を擱きたいと思えます。

平成十三年七月二十五日

北川正樹先生を偲んで

松田 史明

(とんけし耳鼻咽喉科クリニック)

昨年、同期の長尾先生がアメリカから一時帰国した際、登別、室蘭にいる同期のもの数人で会を催しました。その時、幹事役をされ、元氣におられた北川先生が緊急入院されたと聞かされた時は、正直、驚きで何が何だかわかりませんでした。かなり全身状態が悪いと聞いて主治医をされていた新日鐵室蘭総合病院の野尻先生（先生も同期です）に、「面会は可能だろうか」と伺ったところ、オーケーが出て、急遽お見舞いに出かけたのですが、私が思っていた以上に病状は悪く、本人とは話が出来ず、野尻先生に病状の説明を受け、御両親に今までの経過等を聞いて帰宅しました。その後、一時小康状態でしたが、再び全身状態が悪化し、平成十三年五月十日訃報を聞く事になりました。北川先生とは大学時代、ポリクリも、部活（北川先生はバスケット部でした）も違うことから、話し込んだり、夜の街に出かけたりするような事はありませんでしたが、先生とは、函館五稜郭病院で、勤務する機会ができ、その頃より公私にお世話になる事になりました。勤務して三年目に、北川先生から突然、「来年、登別で開業する事になったんだけど、登別市の方では耳鼻科Drも希望しているので一緒にどう？」と誘われました。

急な話しだったので、「今すぐには無理だわ」とその時には断ったのですが、先生が函館五稜郭病院を退職される直前にも、わざわざ登別市の方と開業の勧誘にこられ、現在、登別でこうして開業となっております。先生はあまり大きな会や会議には出席される方ではなかったように思いますが、他人の私にでもお世話をしていたら、違う一面を見た思いでした。一人を好む（？）方で、自分に住み付いた病魔にも気づかれずにおられたのでしょうか？。人生四十年で、さぞ無念の事だったと思います。

特に、御両親、妹さん、また休診を心配され、真つ先に北川先生の室を訪ねられ、御診察された新井先生や開業当初より公私に相談役となっておられた菊地先生の心の中いばかりかと思えます。

今でも北川先生の医院の前を通り過ぎる時、生前の先生のお姿が思い出されます。主のいない医院はあまりにも寂しいです。若くして永遠の眠りにつかれた先生の御冥福を心からお祈り申し上げます。



東北大医学部良陵同窓会 室蘭支部小史の追加の件

鴨井清一

(鴨井整形外科医院)

去る平成十二年十二月一日発行、波久鳥(室蘭市医師親交会誌)第二十一号、室蘭支部小史に於いて、御尊名洩れ有り、謹んで御追加訂正を申し上げます。

- | | |
|-------|--|
| 田中 英一 | 東北帝大医学部、大正15年卒、昭和5年〜8年、市立室蘭病院、外科、富山市開業、逝去 |
| 沼倉 武雄 | 東北帝大医学部、大正15年卒、昭和3年〜7年、市立室蘭病院、耳鼻科、弘前市開業、逝去 |
| 長倉 五郎 | 東北帝大医学部、昭和8年卒、昭和9年〜12年、市立室蘭病院、外科、船医、伊東市 |
| 菊地 省吾 | 東北帝大医学専門部、昭和18年卒、昭和28年〜33年、市立室蘭病院、皮膚科、高崎市開業 |
| 石原 純 | 東北帝大医学部、昭和20年卒、昭和21年〜24年、市立室蘭病院、小児科、小金井開業 |
| 菅原 庸雄 | 東北大学医学部、昭和24年卒、昭和31年〜48年、市立室蘭病院、内科、三友堂病院岩切病院第一ビル診療所、仙台 |

四方田 孝	東北大学医学専門部、昭和24年卒、昭和35年〜40年、市立室蘭総合病院、耳鼻科、仙台市開業、平成6年逝去	堀 重昭	東北大学医学部、昭和34年卒、昭和35年〜38年、市立室蘭総合病院、外科、東北大学医学部講師、大分医科大学教授
阿部 洋	東北大学医学部、昭和24年卒業、昭和30年〜34年、市立室蘭病院、小児科、宮城県志津川開業	川崎平八郎	東北大学医学部、昭和34年卒、昭和39年〜44年、市立室蘭総合病院、小児科、東北労災病院、仙台市開業
馬場 義男	東北大学医学部、昭和24年卒、昭和25年〜28年、市立室蘭病院、皮膚科、我孫子中央病院、千葉県流山市開業	大原 和夫	東北大学医学部、昭和36年卒、昭和44年〜47年、市立室蘭総合病院、小児科、水府病院
相川 七郎	東北大学医学部、昭和25年卒、昭和27年〜30年、市立室蘭病院、小児科、弘前市開業、仙台・昭和49年逝去	小野 宏	東北大学医学部、昭和37年卒、昭和43年〜47年、市立室蘭総合病院、内科、神奈川県秦野市食薬品センター研究所
工藤 和男	昭和25年、艮陵会入会、昭和32年〜50年、市立室蘭病院、外科、昭和50年逝去	辰野 克子	昭和7年、艮陵会入会、昭和37年〜40年、市立室蘭総合病院、小児科、竹田病院戸塚クリニック
田代 昭男	東北大学医学部、昭和28年卒、昭和44年〜47年、市立室蘭総合病院、内科、水府病院、メディカルセンター所長	大村 達雄	東北大学医学部、昭和39年卒、昭和40年〜44年、市立室蘭総合病院、小児科、大館市立病院、鹿角市大里病院
高橋正二郎	東北大学医学部、昭和29年卒、昭和30年〜33年、市立室蘭病院、外科、岩手県立中央病院、盛岡病院	島貫 政昭	東北大学医学部、昭和43年卒、昭和45年〜47年、市立室蘭総合病院、山形市立病院
牧野 一雄	東北大学医学部、昭和31年卒、昭和32年〜35年、市立室蘭病院、外科、静岡県三島病院、韭山町開業	福田 守邦	東北大学医学部、昭和43年卒、昭和44年〜47年、市立室蘭総合病院、小児科、国立水戸病院
中野 盛夫	東北大学医学部、昭和33年卒、昭和40年〜46年、市立室蘭総合病院、産婦人科、八戸市病院		
井沢 潔	東北大学医学部、昭和33年卒、昭和41年〜45年、市立室蘭総合病院、内科、仙台通信病院石垣病院		

病院訪問

―医療法人友愛会恵愛病院編―

吉井 大介

(愛生マタニティークリニック)

対談者…恵愛病院

理事長 院長 遠藤秀雄先生

副院長 角 哲雄先生

訪問者…愛生マタニティークリニック

院長 吉井大介



恵愛病院は、室蘭市と登別市を結ぶ交通の要衝に位置し、昭和三十年に開設以来、地域に開かれた精神病院という伝統を育み、地域の多くの人々に親しまれてきた。

去る平成八年十二月には厚生省近代化整備事業の補助を北海道では第一号で認められ、新病院をオープンした。この新病院は、外来、検査室、会議室、医局、そして多目的ホールを含む地上二階の外来棟に併設した地上六階の入院棟からなり、病床数二百五十床、診療科目は、精神科、神経科、内科、小児科を標榜し、医師九名（うち精神保健医五名）、職員数百六十六名という大規模な構成で、地域の精神病院としてのみならず、地域の人々の健康づくりの中核的存在として機能している。

そこで、この新恵愛病院の特色を詳しく紹介していく。

一、厚生省近代化整備事業認可、

道内第一号

この補助を認められるためには、施設基準、人員配置、設備、アメニティーの完備、そしてその病院の特徴を持たなければいけない、などの条件を満足してい

なければならず、それをすべてクリアして、道内第一号という快挙を成し遂げた。余談になるが、これをきっかけとして、恵愛病院をモデル病院とした道内の精神病院の改築ブームに、火をつけることになり、現在でも見学者が絶え間なく来られると言うことだ。

二、機能別病棟

道内では数少ない機能別病棟による管理をしている。急性期病棟、精神科療養病棟、痴呆療養病棟に分類されているが、特に痴呆療養病棟に関しては、新病院の特色として重要である。最近の急速な高齢化によるお年寄りの増加に伴い、老人の療養施設の必要性が叫ばれているが、特に痴呆老人を受容できる療養施設が非常に少ない。その現状を踏まえ、恵愛病院ではその痴呆老人をターゲットとした療養病棟を開設した。患者本人だけではなく、その家族にとっても高い需要を見込まれるアドヴァンテージを持った特色と言える。

三、多目的ホール

厚生省近代化整備事業の必須条件としてアメニティーの完備がひとつの特徴である。その中で象徴的なものが多目的ホ

ールである。病院内の行事などに利用されることに加え、なかなか入り辛いと思われるに、地域の人々に広く開放している。年に一回開催される「こころの健康教室」では約二百名の地域住民が来られるなど、地域との接点の有効な手段として機能している。そのほか、精神障害者の家族会の例会、幼稚園児と老人とのふれあいの会も年に一回開催され、地域の人々に精神科医療を理解し、さらにもっと生かしていただくことに尽力されている。

四 安らぎと温もりをモットーとした

医療の提供および鉄格子の排除

個人の心の安らぎと温もりを生むためには、心のケアがとても重要である。多目的ホールの地域住民への開放により、精神科医療に対する偏見を無くすばかりでなく、医療の提供を潤滑にする。その考えは、精神病棟と鉄格子は切っても切り離せないものという既成概念を撤廃し、精神病院のイメージを一新したことに表れている。

五 痴呆専門の老人デイケアの開設

痴呆療養病棟とともに、高齢化社会に

対応すべく痴呆専門の老人デイケアを開設した。通常のデイケアでは対応が十分と思われる痴呆老人に対して、痴呆専門のデイケアの専門スタッフが対応していただけるのはとても安心できる。しかし道内でこのような専門デイケアがまだまだ数少ないということである。

六 精神科研修指定病院

厚生省から精神科研修指定病院に指定され、実際に日鋼記念病院の研修医の精神科研修の担当をしている。

七 職員研修の徹底

年に六回の職員研修会を開催し、大学から講師を招いたり、病棟や各部署からの問題提起など活発に行われ、病院全体のシステムのレベルアップに努めている。職員研修に関しては、現代の医療の必須となつてはいるが、実際に私が訪問したときの事務員や警備の方の対応は、マニュアルどおりの無機質なものではなく、とても温もりを感じる好感の持てるものであった。

高齢者の増加、不況の蔓延、リストラ、情報の氾濫、二十一世紀の私たちを取り巻く社会は、より複雑化し、ストレス社

会から生まれるうつ病の増加、痴呆の増加、引きこもり、不登校、摂食障害、境界性人格障害など、人間関係もより高度に複雑化し、問題も多面的にと変化している。そういう中で人生をより良く全うするために忘れてはならないものは、メンタルヘルスである。

現実かというと、精神科医療に対する根強い偏見、その偏見に起因する地域社会との隔絶や、インフラの整備の立ち遅れなど、精神科医療にとつての未来は、決して容易な道とは言い難い。恵愛病院は、開院以来半世紀にわたり、「安らぎと温もり」をテーマに、常に地域との融合を図り続け、精神科医療の地域への提供を惜しまず行ってきた。そのテーマに対するひとつの回答が、現在の新病院であるように思う。私は今回の訪問で、少なからずあった精神科に対する偏見を過去のものとし、メンタルヘルスの多様化した適用性の広さを再認識することになった。会員の皆様にも、そのことが少しでも伝わることを切望し、お疲れの中、遠藤院長、角副院長の貴重なお時間をいただいたことに感謝し、今回の訪問を終えることにする。

愛生マタニティークリニックを 訪問して

生 田 茂 夫

(いくた内科クリニック)



愛生マタニティークリニックは蘭東地区の中心地中島町の、それもなんと繁華街のど真ん中にあります。通をはさんで正面には丸井デパート、隣にはわかさいも本舗、ミスタードーナツと一日中人通りの絶えることのない恵まれた立地条件に位置しております。また学生の乗ったバスの中継地でもあることから、十代の若い患者さんが意外と多く受診されるということです。クリニックの玄関に入ると、待合室にはプロジェクトテレビが見やすい場所にあり、産婦人科の啓蒙

ビデオが映し出されていました。壁には吉井先生が行っている不妊治療などを取り上げた雑誌や新聞記事のパネルが掲示されておりました。私が訪問すると受付の人がやさしそうな笑顔で「いらっしやいませ。お話を伺っておりますのでお掛けになってお待ちください。」と明るく声をかけてくれました。産婦人科の待合室というものは、男性にとつたたとえば仕事であつても入りにくいと思うのですが、この応対でいっぺんに心が安らぎました。初めて受診した患者さんもこのようにやさしく声をかけてもらうことでとても安心できるのではないかと想像されました。これは院長先生が普段から職員の方にきちんと指導をされていらつしやるのだらうと思いました。

それではまず院長の経歴を紹介する事にします。吉井大介院長先生は昭和六十年に東京医科大学医学部を卒業され、その年に東京女子医科大学産婦人科教室に入室されました。その後、東京女子医科大学総合医療センターや国立国際医療センターなど最先端の医療現場や研究室で御活躍されました。その間「MRS（核磁気共鳴スペクトロスコピー）」を用いた

胎児低酸素症における脳細胞内のエネルギー代謝』についての研究をされ、海外において数多くの学会発表を行い、そのオリジナリティに対して高い評価を受けました。平成十年には医学博士学位を取得されております。また、臨床においては周産期学、不妊治療学を専門とされておりました。中でも『ヒステロスコープを用いた配偶子卵管内移植法』を開発し、我が国で初めて、世界で二番目の成功例を学会で発表されました。その方法は国際学会でも高い評価を受け、世界で一例目を成功させたドクターからも院長先生が開発された方法、技術力に対して高く評価されたとのことでした。

平成五年四月に出身地である室蘭に帰られ、平成七年五月には愛生マタニティークリニックの院長になられました。「患者さんの身体のみならず心の痛みや苦痛をとりのぞき、安心と希望を感じることができるようになることこそ医療の原点。」という考えを基本として「患者さんに最新の設備でどんなに良いことをしてあげても、それは医療従事者の自己満足に過ぎない。患者さんがこの病院に来て本当に良かったと思ってもらえるこ

とをしなければいけない。」これを全職員に徹底的に実行するように教育しているとのこと。

世間では少子化の傾向が依然として強く、一人のお母さんがお産をする回数が減ってきております。それだけに人生の中で一度か二度しかない妊娠、分娩という大イベントをいかに安全に、かつ感動できるかということに重点をおかれているそうです。また少子化の一因でもある女性の社会進出に伴う晩婚化は、潜在的不妊症を増加させているとも言われております。さらに働く女性のみならず全女性のQOLの向上は二十一世紀では益々無視できないものとなっております。そこで愛生マタニティークリニックの特徴を具体的に紹介いたしますと、まず第一に不妊治療、つぎに座位無痛分娩、最新内視鏡を駆使した低侵襲の婦人科手術、そして漢方、これらがクリニクスの柱になっているそうです。

一、不妊治療

不妊治療は先生が東京の最先端の病院で専門とされてきた分野であります。室蘭に帰られてからはIVF-ET（体外受精胚移植法・体外で精子と卵を受精さ

せ、その受精卵へ胚を二日後に子宮内に戻す方法）を中心にして精力的に行い、IVF-ETの胚移植あたりの成功率は八割近くを維持し全国のトップレベルと肩を並べる成績をあげております（国内の平均は約三割弱と言われている）。また、平成十二年からはIVF-ETの進化した形であるIVF-Blastocyst Transfer（体外受精胚盤胞移植法・体外で培養する日数を五日間と通常よりも長くし、子宮に着床する直前の胚盤胞という段階で子宮に戻す方法）を北海道で最初に手がけ約九割という高い成功率を納めています。

病院の二階には体外受精を行う部屋（IVFルーム）とそれに隣り合った体外受精をうける患者さん専用の病室があります。IVFルームには患者さんから卵を採取する内診台があり、カーテンを隔ててクリーンベンチ、二酸化炭素・特殊混合ガスなどのボンベを備えた細胞培養器、遠心分離機、精子受精能を分析する器械などが所狭しと並んでおり、さらながら大学の最先端の実験室というような状態でした。IVF-Blastocyst Transferでは培養液を三〜四種類使用するなどデリケートな手技を要する為、日中の診療を終え

た後に先生ご自身が行われるとのことでした。このように経験を積まれた先生自らが細心の注意をはらって培養を行うことで高い成功率を保っていると感じました。このように最先端の治療法を行っている一方、不妊に悩む夫婦に対してはまず女性一人に診察を受けてもらい、必要であればプライバシーに配慮し、他の通院患者さんがいなくなった診療後に院長と夫婦との三者でカウンセリングを行っているとのことでした。

二、座位無痛分娩

現代女性が望む分娩は『吉野家の牛丼』だそうです。安い、早い、うまい。つまり安全で楽に早く、そして感動してもらえるお産が今望まれていて、それに対する答えが、座位分娩、無痛分娩だったということです。実際に座位分娩、無痛分娩は、座った姿勢で楽にお産ができると産婦さんにはとても好評なようです。分娩台は足を開いて自然に座るような椅子になっておりました。寝る姿勢よりも座った姿勢のほうがいきみやすいし、重力の力で赤ちゃんが出て来やすくなりますから分娩時間が短縮し、お母さんも赤ちゃんも疲れないし、出口が裂けることも

とても少なくなるそうです。また、無痛分娩も積極的に薦めているとのことですが、硬膜外麻酔を行うことで、赤ちゃんの出てくる産道が拡がり、陣痛の痛みも緩和されるので、ニコニコしながら分娩される方も少なくないそうです。その結果、お産にかかる時間は従来法の半分以上に短縮でき、分娩時の安全性も向上し、母児の体力の消耗が減少することで産後の回復がとても早いそうです。当初スタッフに戸惑いはあったそうですが、実際に体験されたお母さんの姿を見てスタッフの方も座位分娩、無痛分娩の優れていることを十分理解してきたとのことでした。赤ちゃんが生まれてくるところが見えて、そのまますぐに胸の中に抱かせてもらって、その胸の中で最初の産声をあげる。それを経験したお母さんたちの目には必ず、澄んだ熱い液体があふれ出てくるんですよと、吉井先生は熱く語っていました。

三、最新内視鏡を駆使した

低侵襲の婦人科手術

また、手術室には北海道でも珍しい最先端の微細腹腔鏡、子宮鏡、卵管鏡などが備えられており、開腹せずに子宮全摘

出手術を行うLAVH、卵管鏡を用いて専用のバルーンカテーテルで卵管の狭窄部位を拡張するEUSシステム、子宮鏡を用いて卵管内に精子を注入するHIFU、そのほかこれらの内視鏡を駆使した低侵襲の不妊治療や婦人科手術を行っているそうです。開業医のところでは、大学病院にも優る最新治療を院長先生お一人でごなしているの伺い、ただただ驚くのみでありましたが、吉井先生のこの行動力の源は、きつと『この病院に来て本当に良かったと思ってもらえることをしなければいけない。』という信念から来ているものだと感じました。

四、漢方

漢方は四千年の歴史があり、西洋医学よりも優れた点が多々あることから、医療を行ううえで積極的に取り入れているそうです。漢方には人間の自然治癒力を引き出す効果があり、そのほかにも西洋医学では手のつけようがなかったり、反対に見過ごされてしまうような愁訴を的確に治癒することが可能になる手段だそうです。吉井先生が居られた東京女子医大には東洋医学研究所があることから、漢方を取り入れることにまったく違

和感がなかったそうです。不妊症、思春期の生理不順、生理痛、いわゆる更年期の不具合などには、とても効果的で、そのほかにも男女を問わず整形外科、皮膚科、喘息、不治の病（これにはさすがに頭を抱えているそうです。）の患者さんがやってくるそうです。

以上のような特徴を持つ、愛生マタニティークリニックの院長の吉井先生は、お話の最中、何度も「開業医であっても、私たちは常に『医療』というもののレベルを向上させていかなくてはいけないんです。」と情熱に満ちた語り口で話してくださいました。また、インタビューのあいだ終始笑顔で応対してくださった先生は、患者さんにも安心感を与えてくれる方だと感じました。ご苦労されている点はいつお産があるかも知れず、入院施設があることからなかなか遠くへは出かけられないことだと話されていました。お住まいは病院の上にあるとのことですが、ご家族は奥様と二人のお嬢様、雌猫二匹だそうです。病院のスタッフもすべて女性、患者さんも当然女性ばかりとのこと。病院建物の中には男性は院長先生

お一人とのことでした。そのようなわけ
でたまにお酒を飲みに出かけるような時
には、女性のなるべくいないような店に
行つてほつと一息されているそうです。

最高の医療を行うことに対して強い情
熱をお持ちになり、患者さんに『この病
院に来て本当に良かったと思つてもらえ
ることをしなければいけない。』という
信念を職員とともに実践されているとは
言うものの、それは決して一朝一夕で実
現できるものではなく、院長先生が長い
間の苦難を乗り越えて築き上げてきたも
のであることを実感いたしました。

今回は、先生が患者さんのお産を終え
たばかりで非常にお疲れの時に訪問させ
ていただきました。そのような状況にも
かわらず長時間お話ししてくださいまし
た。専門外の私にも理解できるように詳
しくお教えいただきましたし、院内もく
まなく見せていただきました。

ご協力していただいたことに心から感
謝させていただきます。有難うございま
した。

いくた内科クリニック訪問記

角 哲雄

(恵愛病院)



波久島本年号から会員の施設紹介なる
新企画が始まることになり、ひよんなこ
とから私がいくた内科クリニックさん
(以下敬称は略します)の訪問記を書く
ことになった。

恵愛病院に赴任して今年で十年目、研
修医のころ市立室蘭総合病院に三年お世
話になったので通算すると十三年、医師
としての生活の半分以上をこの地で過ご
したわけで、本来なら登別、室蘭のあら
ゆる事柄に通じていてもおかしくは無い
はずなのだが、恥ずかしながらというべ
きか、あきれるほど何も知らない。今も、
金曜の夜、札幌の家に帰り、日曜夜遅く
登別に戻るという生活。月から金までは
仕事が終わると、病院から歩いて十秒の
病院宿舎に帰って寝るだけなのだから、
当地の事情に疎いのもあたりまえか。こ
のあたりの地理についてもそれは同じ
で、鶯別から東は新生町、西は中島あた
りまでは大体歩けるが、それ以上となる
と何とも心もとない。患者さんが「町
に住んです。」と言えば「ああ、あそ
こ。いいところですね。」と一応、相槌
は打つものの実際はどの辺なのか皆目見
当がつかないことも応々、困つたものだ。
そんなわけで、いくた内科クリニック
の所在地の港北町も今回、地図を見て初
めて認識した次第。何度も地図を見返し
て道順を覚えて出発したのが七月四日の
夕方。

この日は朝から霧雨まじりのパツとしない天気で、恵愛病院を出る頃は、この時季、お約束の海霧がたちこめていた。三十七号線を西に向かい、大同ほくさん前の信号で右折、港北町に入る。本輪西・港北大通線を少し走り、港北町一丁目十一の交差点をもう一度右折すると中島・港北通線、この通りは片側一車線だが路肩に余裕があり歩道も整備されて広く、このあたりではあまりお目にかかれない立派な道路だと思った。その道を、二分も走ったであろうか、右手に外壁をダークブラウンのタイルで統一した瀟洒な建物が見えてきた。いくた内科クリニックである。周辺には、一見して新興住宅地であることがわかる真新しい建物が整然と立ち並んでいた。後で、生田先生に伺ったのだが、このあたりは元々新日鉄の社宅があったところで、それを取り壊したあとの土地を分譲したのだという。

約束の時間に少し間があったのでいくた内科クリニックの周りを歩いてみた。どのお宅も、とにかく立派、庭の木々、花々も良く手入れされ、私の頭にあった室蘭の町並みとは趣を異にしている。こんなきれいな町が室蘭にあったというこ

とに少し驚き少し感動した次第。それともうひとつ、驚別を出るときは海霧がたちこめるうつとうしい夕方だったのに、港北町あたりは穏やかな初夏の夕暮れ。ずいぶん天気も違うものだと思った。

いくた内科クリニック前に戻る。駐車場のスペースがたつぷりとつてある。これだけ広いと運転の苦手な女性、高齢者も楽に駐車できるだろうし、患者増にも寄与することだろう。玄関には緩やかなスロープがあり、車椅子の患者さんでも楽に入れるようになっていいる。このような細やかな心遣いが嬉しい。

ここで生田茂夫先生をご紹介します。先生は小樽出身の四十九歳。小樽商大を卒業し、コピーメーカーに三年勤務、営業畑を歩むが、その後心機一転、医学の道を志し、札幌医大に入學した努力の人である。昭和六十年同大卒業、母校の第一内科に入局し、主に消化器疾患を学んだ。関連病院で研鑽した後、千葉県にある国立松戸病院で肝臓疾患のトレーニングを積むが、そこでの経験は大変貴重なものであったという。

その後、市立室蘭総合病院に平成六年から勤務、その間、「コンビニの如き診療

所を持つ」という夢を叶えるべく、開業を考えるようになる。開業の地として、氣にいった町、室蘭を選ぶのに迷いは無かった。それでは、室蘭のどこにするか。

そこで生田先生は徹底した市場調査を行う。このあたりがかつて営業に従事した人の強みであろうか。そして港北町が有力地として浮かび上がる。その理由として、生田先生が挙げたのは、地域に内科医が少なく、かつ総合病院との競合が少なくと思われること、新興住宅地があり今後も人口増が期待されること、リタイアした人が多く医療を必要とする人が少なくないと考えられること、室蘭の中では氣候に恵まれた地であることなどであった。最後の点については、訪問した日の驚別と港北町の天氣の違いを見て合点がいった。かくして、平成十年十月十五日いくた内科クリニックは開業した。なお法人化が為されたのは十二年十二月一日のことである。

玄関から中にお邪魔する。受付の女性が出迎えてくれた。いくた内科クリニックのスタッフは、生田院長の他に、看護婦四人、受付・事務三人である。待合室は木のおいがして清々しい。二人がけ

のソファがゆったりと並び、さらに円形の大きなソファが置いてある。小さな子供はこの上で遊びながら、診察を待つのだろう。待合室の広さとしては十分という印象を受けた。

待つこと五分、診療を終えた生田先生登場、先生とは波久島の編集委員会二度ほど一緒したが、特にお話したこと無く、今回が実質初対面のようなものである。精神科を生業にしているためか、つついそのひとの表情、姿態、振る舞いなどを観察してしまう癖が自分にはある。そして生田先生、先生は表情柔和、顔貌、体型とも丸みを帯びて、温かなイメージを与える人、人柄も外見と同じようにきつと穏やかなのだろう。患者さんも私と同じような印象を持つだろうから、開業医としては得かなと思った。

さて、先にも述べたように先生は「コンビニの如き診療所」を志向している。「広く浅く」という意味と理解したが、これはとりも直さず、プライマリーケアあるいは家庭医の理念に通ずるものではないか。勿論、ご専門の肝臓、消化器に關しては、浅くなどと言うと全く失礼千万で、かなり高度の医療も行っていると

お見受けした。しかし、とにかく身の丈をわきまえた医療、決して無理をしないというポリシーを貫いていることの証拠として、他施設への紹介件数が開業以来六百八十四例に及ぶということが先生の自慢でもあるが、これは開業後、一日一例づつ紹介してやつと達成される数字で、率直に評価したいと思う。

患者さんの住む地域はほとんどがクリニクから車で十五分圏内、八丁平方面の患者さんも増えているという。予想外だったのは子供の患者が多かったこと、現在全体の十五%弱を十五歳以下の患者が占めているという。新興住宅地に若い層が予想以上に移り住んで子供が多くなったこと、付近に小児科が無いことが関係しているというのが生田先生の分析である。そして御多分にもれず、これら患者さんのデータはパソコンでしっかり管理されている。

最後に先生のプライベートな部分を少し。国立松戸病院の看護婦であった新潟出身の奥様との間に三児に恵まれた。小学生二人と幼稚園児。家族揃って、冬はスキー、夏はキャンプに出かけるのが無上の喜びと柔和な顔をさらにほころばせ

て生田先生は語ってくれた。

人口増が期待されしかも医療施設の少ない地域を選んだという明断、さらに先生自身のお人柄がまいて、いくた内科クリニクの前途は洋々たるものがあると感じながら帰途についた。八丁平を抜けて帰ってはどうかという先生の勧めに従って、八丁平へ向かう上りの坂道を愛車オデッセイを走らせながらふと振り向くと、暮れなずむ港北町の町並みを背景に、いくた内科クリニクのネオンが鮮やかに見えた。



ズカラ

あんらくいす



ユーフラテス川、
旧約聖書、イスラム

上田 智 夫
(上田医院)

北の空港

是非一度は行きたかった中東へのツアーがあり、関空発のヨルダン航空で年末に出発した。十分な時間的余裕はみただが、冬の千歳空港は降雪と風で大荒れ、全面閉鎖され寅さんが空港内をウロウロしているのがテレビにも写っていたらしい。細かい点は省略するが出発は六時間おくれ、国際線の出発を大巾におくらせてすべり込んだ。チャーター便であったので、先に送った荷物を機内に積み込むなどして待つてくれたW航空サービス、機内で文句も言わずに待つて下さったツアーのお客様、本当に有難う。

文明発祥の地



ユーフラテス川とドウラ・ユーロボス

中東は数かぎりない民族と文化が交代して、簡単には紹介できない。更に現在でもイスラエル、レバノンが危険との外務省の意向もあって、シリア、ヨルダンのみの旅となった。都市別ではおさまりがつかないので、文面が各地を飛びまわるが、歴史と文化別に思い出してみた。

ユーフラテス川沿いには古代の遺跡が無数にある。なかでもマリは古く、前(紀元前)三千年から栄え、バビロニアのハムラビ王に滅ばされた。出土した眼を大きく開いた王の像などが有名だが、遺跡

の保存はあまりよくない。エボラは有名なエボラ文書の出土したところで、図書室と思われる場所から一万二千枚の粘土板が発見され、聖書の記述の具体的な裏付けともなった。フランス隊が発掘中だが、資金の関係もあって発掘休止中は、日干しレンガの遺跡が雨水で流失するのを防ぐ為に、セメントで覆っている。

ドウラ・ユーロボスは、アレキサンダー大王の部将セレコウスによって前二百年に作られた軍事都市、ユダヤ教のシナゴーグから見つけられたフレスコ画が、ダマスカスの国立博物館に展示されている。川向こうにはイラクも遠望出来る。ちなみにシリヤ人のガイド氏は名前がフセイン、アラブではイラクのフセインも有名人である。

ハマの水車は、ビザンチン時代から廻りつづけている巨大なもので、一番大きなものは直径二十米、アル・モハンメディーエと名前も付いている。

三十一日から元旦にかけて、ユーフラテス沿いのデリゾールに宿泊。ニューイヤープでおさわがせの寅さん、夜の席を設けてあるとの事で張切って出席したが、残念こ、はイスラム教国でした。一

応アルコール類は用意されているが、飲むのは我々外人さんだけ、今一つ盛り上がらない。甘い物を食べて、ベリダンを見たり、輪になってジェンカを踊ってもなあ。お楽しみ抽選会は、八百長なのか日本人は当たり前、立派なアラブ刀（刃は勿論ない）があたった人がいたが、空路持ち帰りが大変だったろうなあ。

明けて二十一年正月、最古の文明発祥の地ユーフラテス川の初日はやはり大感激。W航空は面倒見の良い事で知られているが、樽酒、お屠蘇、お雑煮、お箸、寅さんには嬉しいが、御苦勞様です。

地域的には砂漠の中だが、パルミラもこ、で説明したい。人類が住んだのは古く、七万五千年前の石器が出土する他、前千八百年の楔形文字に、タドウミル（パルミラの旧名）の地名が出てくると言う。シルクロードの隊商都市として、ローマとパルティアの二大勢力の間をうまく泳いで繁栄したが、クレオパトラにも比せられる、誇り高く美しい女王ゼノビアがローマに抵抗して滅亡する。

遺跡の列柱道路やベル神殿は、テレビでもよく放映されるし、観光案内書や美術書にもよく出てくるが、実に大規模で



パルミラの列柱道路

壮大である。また、岩山にそびえるアラブ城からの夕陽のながめも、興亡の哀歎をにじませて心をくすぐる。墓の谷には、四階建の巨大なエラベール家の墓もあるが、世情の移り変わりによって部分的に分譲しているとか。観光地化して、物価は高く、夜のベッドウインのテント見物は寅さんの健康状態を考えて欠席。

ナバティアの遺跡

シリヤの南部、ヨルダンとの国境に近いボスラはアレキサンダーの征服により植民地となり、のちナバティア人の北の都となる。この地のローマ劇場は中東一の巨大なもので四階建て、観客一万人を収容できるが、他と異なって玄武岩を使用していて全体に黒っぽいのが特徴であ

る。



ペトラのエル・ハズネ

ペトラは、デザートハイウェイを下った南のヨルダン最大の見所。時の刻みと同じくらい古いバラ色の都市」は、インディ・ジョーンズ最後の聖戦の撮影地としても有名で、シークという狭い断崖の谷間の道を三キロほどぐり抜けると、突然視界がひらけて、エル・ハズネに行きあたる。この驚きと感動はやはり素晴らしいとしか表現出来ない。一日に五十回もそのバラ色を変えるという、高さ三十米の巨大な岩をくり抜いた建築物は、神殿ではなく宝物殿であったとの事。ナバテア人は前六百年頃から定住したが、地震や戦乱などで忘れ去られ、十九世紀始めにブルクハルトに再発見されるまで秘密に隠されてきた。エル・ハズネ

の奥には、大寺院、ライオン寺院、ローマ劇場、凱旋門、王家の墓などがあり、ラクダ、馬などが観光客を乗せて歩きまわる。更に奥の山手には、九百七十三段の階段の上に高さ四十五米余のより巨大なエド・デイル（通称修道院跡）がまつている。山道は山羊に乗った人もあるが、余り快適とは言えなかった様だ。寅さんはこの時期はまだ元気があって完登した。

初期キリスト教と十字軍

ヨルダンの首都アンマンの近くに、ネボ山とマダバがある。死海とその向こうのイスラエルがよく見えるネボ山は、エジプトを出て来たモーゼが約束の地を望見する所。「こ、があなたの子孫に与えろ」とわたしがアブラハム、イサク、ヤコブに誓った土地である。わたしはあなたがそれを自分の目で見るようにした。あなたたちはそこに渡って行くことは出来ない。申命記三十四章」。モーゼはこ、で死亡するが、山上の教会には杖と蛇のモニュメント、古いモザイクなどがあり、近くにはアイン・ムーサ（モーゼの泉）があつて、モーゼが岩を打って水を出し

た所、泉はペトラにもある。余談だが、ツアーの中に日本人はなれをした風貌の人がおり、当初は「釣りバカ日記のスーさん」、次いで「老人と海のヘミングウェイ」となり、この地に来て遂に「モーゼ」に昇格した。



ネボ山の教会とモーゼ？

マダバの聖ジョージ教会はギリシャ正教、床のモザイクは六世紀のパレスチナや地中海を示しており、エルサレムのキリストの墓の所在をも表示している。

聖アナニア教会はダマスカスにあるごく小さな教会で、洞窟のような教会堂へは階段を下ってゆく。キリスト教布教の功労者で、のちに聖パウロと命名されるサウロは、熱心なキリスト教迫害者であった。彼がダマスカスに近づいた時、天から光がさし、「サウロ、サウロ、なぜ私

を迫害するのか。使徒行伝 九章」との声と共に失明する。のち声に導かれてダマスカスのアナニアに洗礼を受けて回心し、小アジアの伝道者としてキリスト教をユダヤ地域以外の世界に広めたゆかりの場所、その一生の絵が展示されている。



クラック・ド・シュバリエ遠望

クラック・ド・シュバリエは、シリア中部で地中海に近い十字軍の城。十字軍は聖地侵攻で多くの土地を諸国の王や豪族に分割したが、こゝはトリポリ伯レイモンが騎士団に寄進したもの（千百四十二年）で、遺構はほぼ完全に残っている。四千人の守備隊が住めた巨大な兵舎、

宮殿、食糧庫、兵器庫、狭い通路、隠し階段などがあり、かつてリチャード獅子心王も祈った礼拝堂は、千二百七十一年アラブに攻め落とされてからは、イスラムのモスクとなっている。

イスラム

シリアの首都ダマスカスは、四千年の歴史を有し、旧約聖書のノアの次男ハムに与えられた土地で、オリエントの真珠とた、えられた美しい所。



ウマイヤド・モスクとヨハネの墓

ウマイヤド・モスクは世界最古のモス

ク、女性は頭と身体をベールで包まない、と、入場出来ない。内部にキリストに洗礼を授けたヨハネの墓が囲ってある。今年歴史的和解と称して、ローマ法皇がはじめてモスクを訪れたのもこゝで、一般に西欧はイスラムに対してきびしい見方をするが、本来的にはむしろ他の宗教の信仰に対して寛大であったのではないだろうか。モスクの入口附近には、十字軍と戦ってエルサレムを奪回した、アラブの英雄サラデインの廟がある。勇将であったが、意外に寛容な面もあり、むしろ十字軍に聖戦の名のもとに残虐な行為が多かったらしい。

ダマスカスの国立博物館には、世界最古のアルファベットの粘土板、マリの国王像、ギリシャ、ローマの遺品など目をみはる物が多いが、案内書は日本語は勿論、英文、ドイツ語もなく、フランス語版のみ。（シリアは一時フランスの委任統治地）ほかの版もどこかで買えるのだから、フランス語では読めないなあ。

アレppoはシリア第二の都市、いわゆる肥沃な三日月地帯の頂点に位置するため、アモリ、フェニキヤ、ギリシャ、ローマ、ペルシャ、ビザンチン、十字軍、

モンゴル、アラブ、フランスなど目の廻る様な変遷の歴史をくり返している。アレクポ城（シタデル）は、前千年頃のヒッタイトの神殿から始まり、十字軍やモンゴル、チムールなどの攻撃に耐えぬいたアラブの名城である。近くに大きなスークがあり、こゝで有名なオリブ石鯨を買った。女性を中心に人気が高いのだが、嵩ばるのと重いのが悩みのたね。一般にシリヤは、ヨルダンに比べると格段に物価が安く、蜂の巣のまゝの蜂蜜、香料、カラフルな衣料などいづれも安い。



スークの石鯨屋

シリヤから国境を越えてヨルダンに入

った土地のジェラシユは、アレキサンダーの時代から発展し、ローマ時代の遺蹟が見事に残っているが、地震、十字軍との戦いなどで見捨てられ、十九世紀に再発見される迄長い眠りについた。「東洋のポンペイ」とも言われ、ハドリアヌスの凱旋門、巨大なフォラム、アルテミス神殿など見事であり、この地のローマ劇場は非常に音響効果がよく、声が観客席に通ることでも知られる。

死海も、ヨルダンは半分をイスラエルに譲ったが、水面下約四百米、塩分三十三パーセントで自然に浮かぶ事で有名、多くの死海グッズがあり、死海の塩、塩石鯨、泥パックなどなど、商魂たくましい。対岸はイスラエルだが、アラブ諸国は公式にはイスラエルを認めておらず、パレスチナと言っており、イスラエルという言葉には注意を要するとの事。

書き残した事も多く、アラビアのロレンスとアカバ港、キャラバン・サライ、アゼム宮殿、ヨルダン川西岸などは又の機会にしたい。

ミレニアムの修学旅行

鴨井清成

(鴨井内科医院)

二〇〇〇年の三月、室蘭中学校（昭和十九年卒）の同期会が東京の幹事の肝入りで、観光を兼ね二泊三日の日程で東京で行われた。

⑦を過ぎて数年、同輩の者が減少して行く今日この頃である。又、同期生の大半も穩居か数病息災の身分で現役の者は僅かである。（同期の医師九名も半数は他界した。）それでも新宿のホテルに集まった者二十数名の白髪的面々は歓談が進む中に、昔の面影が残る元氣な坊主頭の室中生に変わって来た。誠に幹事の云う修学旅行の再現であった。

思えば昭和十八、十九年は戦局は利あらず、学校でも現役の配属将校の教練教育は厳しく、修学旅行の積立金は各人への「防毒マスク」と変わって旅行は中止になった。昭和十九年には徴兵制度は一年早くなり、又上級学校への進学も理工

科系に限り徴兵延期になった。

同期生の中から海軍飛行予科練習生十名（一名は十代で戦死）陸軍士官学校二名、海軍兵学校二名を室蘭駅で見送ったものである。

当日の参加者の中、海兵の一人は容貌も一変した中に面影が残る五十五年ぶりの再会であった。彼は復員後、北大医学部を卒業し現在は東京で病院長として活躍している。最近「遠赤外線の抗瘤療法」の著書を出版してすばらしい実績を挙げている。久しぶりの同期の面々との会合は活力を得た様で楽しくなつかしい再会であった。

三月三十日の夕、帰蘭した時、有珠山は二十三年ぶりに噴火していた。戦争の二十世紀は終わった。

新ミレニアムに向つての、環境と情報の二十一世紀に当って、私としては術後三年、喜寿の年を迎え、元気を頂いた様な修学旅行であった。

遙かなるレインジローバー

齊藤 甲斐之助

（若草内科クリニク）

もう七、八年ほど前のある穏やかな日曜日の昼下がり、畏友F先生と私、なじみの薬屋からなるへぼパーティが、あれは何番ホールのティーグラウンドであったでしょうか、それはゴルフ場の小道にさりげなくおかれていたのです。我々の打つべき方向の右二十度ほど、ティーからは二、三十メートルほどのところでした。ゴルフ場の軽四輪ではありません。午後の暖かい日差しを浴びて銀色に輝く端正な佇まい、緑したたるゴルフ場の中で示す圧倒的な存在感、間違いありません、英国が世界に誇る四輪駆動車、伝説の車、レインジローバーでした。

当時そのような車があるということは知識としては持っていましたがいくら何でもただの四輪駆動車に一〇〇〇万円を軽くオーバーする金額を支払う非常識は持ち合わせてはおりません。斯様な車を

そのような場所に停めておくオーナーの気も知れませんが邪魔な車だぶつけてしまえという威勢の良い声とは裏腹に我々四人はいずれも左方向に情けないティーショットを放つてすくすくとその場を後にしました。遊び終わってクラブハウスに戻りますと件の車が停められております。クラブの理事長M氏の所有であることを教えてもらい得心した次第ではあります。

その頃、まあ今でもそうでしょうが、世の中はRV (Recreational Vehicle) 車ブームではとんどの日本のメーカーがその手の車をラインアップに加えておりました。火付け役はバリダカルラリーで活躍した三菱パジェロではなかったでしょうか。恥ずかしいことに私も、そしてF先生もパジェロの愛用者でありました。F先生は歩み寄ると例の車の中をしげしげと覗き込み、なああんにも無いとのたまいました。確かにパジェロにはついていた仰々しい傾斜計や温度計、高度計やらは無かった筈です。しかしシンブルながら贅を尽くしたインテリアはその高貴なエクステリアと同様我々下々には近寄りがたい雰囲気を漂わせ、いかにも

かの国の畏くも恐れ多い人たちの愛用する乗り物であることを主張しているようでありました。

英国ランドローバー社が四輪駆動車を作り始めたのは半世紀以上にさかのぼります。当初は農耕作業に使われることを想定して作られ Go Anywhere Vehicle として世界に知られるようになります。日本を含め世界中に輸出されましたが、アフリカを舞台とする様々な映画の中にもこの頑丈で無骨なランドローバーをみる事が出来ます。

一九七〇年、ランドローバー社はそれまでのイメージとは異なり優雅なデザインのアلمボデイ、木と革の豪華な内装をもち、オールアルミニウム製のV型8気筒OHVエンジンと信頼性の高いフルタイム四輪駆動機構を備えたレインジローバーを発売します。想定されたオーナーは英国の高貴な人々でした。すなわちかの国の貴族が田舎に所有するというお城とそして都市に持つ邸宅とを行き来する足であり、彼らがその広大な敷地の中で狩猟や乗馬を愉しむための道具であったわけです。貴族たちがアフリカで冒険旅行を楽しんだためか何時の頃からかこ

の車は砂漠のロールスロイスという異名をとるに至ります。極東の、貧乏だったこの国にも輸入はされたようですが購入費用一〇〇万円を越えようというその価格をどのように考えたらいいか。早い話が私らには関係の無い乗り物という



のがまあ当たり前の結論ではあります。さて時代は進み日本も経済大国として国民総生産では英国を断然と引き離しバブルの貴族たちが現れるようになりますとレンジローバーも各地のゴルフ場にその姿を現すようになったということでしょう。バブルがはじけた後も円は引きつづき高い相場で取り引きされ高貴な舶来品を破格の値段で入手することが可能な時代がつつきます。

六年前の冬の事です。から例の砂漠のロールスロイスを目撃してほどなくです。この冬はインフルエンザの当たり年ではなかったでしょうか、毎日毎日押し寄せてくる患者様に朝から晩まで辛い、苦しい症状を訴えられつづけて私はとうとうブレインの方に異常を来たしてしまったのでしょうか。その年レンジローバーは二十五年ぶりにフルモデルチェンジを受け文字通り破格のプライスタッグを付けて日本市場に登場しました。4Lエンジンを積んだモデルは何と五八〇万円という価格でした。日曜日、愛用していたパジェロで札幌に向かった私はその足でディーラーを訪れまだ輸入もされていなかった新型レンジローバーをその場で

注文してしまいました。後で知ったことですが日本に輸入された最初の五十台のひとつであつたそうです。

スエズ運河を経由してはるばると運ばれて来た車に札幌のディーラーで出会うのは長い冬が終わり、リラの花が咲く頃かという頃のことでした。ベージュと言つても良い独特の上品なシルバー色の外装、コノリー革のシートとウォールナットパネルで飾られた内装、肅々と回るV型8気筒エンジン、乗降時には6cm車高を下げるエアースペンションによる重厚な乗り心地は、ロールスロイスに乗ったことはありませんがまさしく砂漠のロールスロイスそのものでありました。パジェロから乗り比べてどうかと問われれば、これはもう話にはならない。彼等の文化の違いをまざまざと見せつけられる思いがいたします。

その頃には正気を取り戻していた私は分不相応なものを手に入れてしまったことを後悔しつつおどおどとステアリングを握り締めて登別へと戻りました。そうなのです、この稿をお読みの方はざまあみろと思われるでしょうが、帰るべきお城もなければ広大な領地も所有しない私

にとつてレインジローバーとの暮らしはやはりしつくりとはしなかったのです。

幾度この北の大地を旅したことでありましょう。この車の広いグラスエリアからはいつもの見なれた光景もイングリッシュの凜とした美しい景色に思えてくるから不思議です。ふかぶかとしたシートに身をしずめて太い革巻きのステアリングを握る自分自身が長身で青い目をした紳士のように思えてくるのが夢見ているのかは分かりません。しかしいつかは現実に戻されるのです。都会の渋滞に巻き込まれた時、高価なプレミアムガソリンが湯水のように消えていくことに心を痛め、駐車場では高い車高と一九〇cm近い全幅を持て余し、あるいは次々と来るリコールに札幌までせっせと持参しては修理を重ねる日々には私は疲れ果ててしまったのでしよう。レインジローバーと私の旅は四年半、三万キロで終わりました。

ある日、月寒のボルボディーラーに何気なく置かれていたボルボ最後にして最良のFR（後輪駆動）セダンS・90に私は再び突然に心を動かされたのです。

普通の人に戻ろう、そう決心した私はこの高貴なレインジローバーと中古のボ

ルボを交換することにしたのです。幾ばくかのお金は必要でしたが新車からわずか十カ月で手放されたボルボS・90を私は生涯の友とすることにしたのです。

そうであればと、昨年の本誌で人生の伴侶であると私が宣言したあのクラシカルなボルボ240はどうしたのかと、そう人は問うかも知れません。あの240はアンティークとして価値が出てくることを期待して密かにある所に隠しているのです。かくして私はボルボのコレクターとなったわけですが、しかし今でも私は何時の日かあの車をもう一度所有したいという願望を、実はいまだに捨ててはいないのです。何時かはあの車が似合う男になれるやもしれない、仕事を引退して田舎での生活を始めたならば、そうしたならばあの車を馬車馬の如くに使える日々が来るかもしれない。嗚呼、遙かなるかなレインジローバーと私は今でも心の中で念じているのです。

追記

ローバージャパンのカタログにはレインジローバーと表示されていますがここではあえてレインジローバーと表記いたし

ました。ちなみに今年知人がロンドンに出かけるというのでかの人々がどのように発音するのか聞いてもらおうと頼んでおいたのですが、悲しいかな日本人のレはLの方のレだったようで通じなかったそうです、ハハハ。レインジローバー (R.R. Range Rover) の 4.6 L モデルには現在七五〇万円の価格がつけられておりますが私の経験では市内の燃費は五 km を堂々と切っておりますし高速道路をどのように走ろうとも八 km がせいぜいです。

第三十五回北海道ドクターズ ゴルフ大会に参加して

鴨 井 清 貴

(鴨井整形外科医院)

平成十三年六月三十日 (土) 午後三時
保健センター前集発のバスに陣どつたのは、斎藤修弥会長を先頭に室蘭市医師会、医師親交会、ゴルフ同好会の足永、西里、神島 (章)、遠藤 (秀)、安藤、三村、児

玉、鴨井 (貴) (以上ハンデ順) の九名であつた。その他、別動隊として、畠山 (照)、田仕、稲川、角 (哲) の四名を加え、当会からは合計十三名の参加となつた。

数日前から室蘭は真夏を先取りしたような高温が続き、寝苦しい毎日だったが、今回の小樽へのゴルフ旅行は良い気分転換になるかもしれないと思いながら乗り込んだ。

道翔バスの到着がギリギリの為、出発したのが午後三時少し過ぎていた。途中、富岸近くの三十六号線沿いのコンビニでビール、おつまみを一名千円徴収にて購入。大いに盛り上がり酔っ払い気味となる。銭函インターより、高速を降り、少し札幌よりに戻ると、こんもりした防風林のあたりに小樽カントリークラブがあつた。室蘭より少し涼しいので安心する。バッグを下ろし少しだけ下見をして、再度バスに乗り込む。

午後五時三十分、小樽グラランドホテル到着。チェックインし、三々五々身支度を整え、前夜祭会場であるホテルノルド小樽へ向かう。前夜祭参加者は斎藤 (修) 会長を始め、西里、神島 (章)、遠藤 (秀)、

安藤、三村、児玉、鴨井 (貴) の八名であつた。多くの先生は歩いて会場へ向かつた。小樽の風情が楽しい。六時過ぎ、会場到着。きちんとしたテーブルに席が設けられ、ディナー形式でピアノの生演奏があり、生ビールを大いに飲んだ。小樽らしいおもてなしと感激した。テーブルについてくれた女性の店を確かめる。小樽市医師会の御紹介で、三千円でOK のようである。午後八時頃、会場を辞し、安藤先生と「アルメリア」に着く。狭い小路のビルの二階でタクシーの運転手も分からない位だつた。出来て三年のこじんまりとしたスナックだつた。

女性の一人が先着しており、我々が一番乗りで少し間をおいてさっきの女性 (ママ) がやって来た。少し飲んでいると地元のお客が五名程やってきて、我々はカウンターの端に寄せられてしまった。そのすぐ後、西里先生を始め室医 Dr. 同テーブルの深川 Dr. と次々にやって来た。久し振りに小樽の歌を唱つて大いに盛り上がった。そのあとさらに、三村先生の音頭で寿司を食べる事となり、すし屋通りの政寿司本店に入る。しゃやを久し振りに食べる。生ビールをさらに飲

み、すっかり酔ってホテルに着いたのは、十一時近かった。

午前四時、モーニングコールで起きる。急いで身支度を整え、午前四時五十分ロビーに集合するも、バスはしばらく到着せず、午前五時十分頃ようやく到着。思ったよりも早く午前五時三十分小樽カントリークラブ到着。急いで受付を済ます。

第一スタート（六時三十分）なので食堂で昼食をと、階段を上る。安藤Dr.と田仕Dr.と食事する。昨夜の痛飲のせいで食欲がない。茶漬けにする。アプローチ、パターを少し練習し体をほぐした後、インスタートへ向かう。私たちのパーティーは、当医師会の西里Dr.始め、釧路の足立功一氏（Hd4）小樽の皆川公夫氏（Hd16）の四名のはずだったが釧路の足立先生が欠場との事をスタート直前に知る。前日の二日酔いと寝不足で不安なスタートとなったが、うまくティーショットも打ててまあまあの出だし。ハンデ16の小樽の皆川Dr.はなかなか飛ばし屋で各ホール西里Dr.、私とはほとんど同じ位置まできていた。インスタートの為、Par5からとなる。三人共

4オンだったが西里Dr. 1パットのパー、他二名は2パットでボギー。2ホール目、11番ホールは三人共2オンしたが一番遠い私のパットが入り、バーデー。酔っている割には調子が良い。3ホール目、私にとっては珍しく1オン2パットのパー、これは大変な事になるかなと思ったが、4ホール目、ティーショットが左サイドの小高い丘状の修理地へ入る。中央寄りにドロップし、残り150ヤード余り、7番アイアンでコントラールショットしようとして思いっきりダフってしまう。アドレスの足の位置が少し低くなっているながら前方右へ打とうとしたのが敗因か？、このショットで何故か張りつめた気持ちが切れてしまい、このホール5オンのトリプル、次もダボと情けない限りである。それでも8ホール目17番ホールで再び1オン1パットのバーデー。ハーフの結果は44と、私にとっては今季最高の出来であった。三人パーティーの為、余りにも早く回ったせいか次の組はしばらくやってこなかった。五十分ほど待ってからアウトスタートしたのは九時前だった。アウトは出だしからショット、パットに自信がなくなり次々とチ

ヤンスを逃すうち5番ホールでトリプルをたたき、以後復活する事なく最後はティーショットでOBまで出してしまい、終戦となった。ハーフ52、トータル96、今季自己ベストタイではあるが残念な結果であった。

ただ自分自身としては今年から使い始めたドライバーに一応自信が持てたのと、昔のアイアンセットでショートホール攻略が容易になった事を評価して満足な部分もあった。

十一時、競技終了。最初のスタートの為、最後の組があがるのは二時間余り後である。少しビールを飲み、お弁当を食べた後、同組西里Dr.と次の組の足永Dr.、田仕Dr.と共に旧コース9ホールへいく事とする。十二時過ぎ出発し隣の旧コースへ。木造のカントリークラブは小さなものでコースも林はなく背の低いブッシュのみで区分され、さながら河川敷のパブリックコースの如くである。ただ風は海岸べりで強くイギリスのスコットランドの風情がある。それでも三々五々色んなパーティーが発売していく。コンペも行われているようで我々の前の組は女性同士で楽しんでたようだ。午

後二時十五分過ぎ終了し、急いで新コースカントリークラブの二階の懇親会場に戻ると表彰式の真つ最中であつた。時に午後二時三十分。プリントをもらい特に表彰のない事を確認すると急いで入浴する。

午後三時、フロントで精算を済ませ、待機中のバスに乗り込む。汗だくでバスの席に座り、さわやかな涼風の中、海岸沿いに続く防風林を見下ろしながら銭函インターより高速へ入る。

昨夜以来の小樽の旅情を感じながら例によつて帰日もビールを飲みつつ帰蘭する。来年の島松カントリークラブでは前日のお酒は控え目にして、十分なスコアを残してきたいものだといふに期する今日この頃である。

平成十三年度室蘭市医師会 モーターリストクラブドライブ会

「フェリー使用での

津軽ドライブは新鮮で、

三味線の音色と共に

夜桜の思い出は尽きせず。」

MMC会長 鴨井清貴

平成十三年四月二十八日(土)夜九時過ぎ、室蘭港フェリー乗場に集合したのは、斎藤光史号(ホンダオデッセイ)、鴨井清成号(ニッサンシーマ)、鴨井清貴号(ニッサンローレルメダリスト)の合計三名であつた。集合を確認し、各々乗船手続きを何とか完了し、運転者、同乗者に分かれてそれぞれの乗船口前で待機となる。

その間、全員で記念撮影を済ます。
午後十時三十分過ぎ、乗船開始。全員



一等での利用となり、それぞれ一等船室各一室を使用する事が出来た。各部屋の位置を確認し、補助金を配り受領証をいただく。

午後十一時二十五分、定時出港。白鳥大橋の下をくぐり外港へ出るとほどなく真つ暗闇の断崖となり、地球岬の灯台を確認するのみである。一室四名用の椅子に腰かけ、テーブルの上にビールを並べ、同行の友人と久し振りの為大いに飲んでしまふ。さらに最近始めたヘボ将棋に付き合ってもらふ。もう一番、もう一番とやっているとな夜が明けてしまった。急いで仮眠する。

四月二十九日(日)午前六時十分前、部屋の下アをノックする音で目覚める。眠気まなこでドアを開けると係員が部屋の鍵を回収する時間らしい。部屋の鍵を渡し、熟睡している友人を起こし、急いで荷物をまとめ、後片づけをする。廊下へ出ると殆どの人は移動を開始していた。階段まで行き車輛用甲板へ降りる。他の会員は既に乗車しておりスタンバイOKであつた。

午前六時二十五分定刻下船。ターミナルビル前で一度集合し点呼確認後、朝食

はターミナルビルではラーメンくらいしかないとの事で、とりあえず出発。どこかのコンビニで済まそうとするがなかなか見当たらず、海岸沿いの国道280号線を一路北上す。蓬田村でようやく見つけて立ち寄る。蟹田町より左折、やまなみラインへ入る。途中パーキングエリアでトイレタイムをとり、再出発する。突然クラクションが鳴り急停車すると道の脇に停車していた車より老人が出てきて道を訪ねられる。最初何と言っているのかわからず困ったがゆっくり喋ってもらうと小泊村はどっちか、と聞いてるとわかる。僕らの進行方向と同じと説明し出発。やまなみトンネルを越えほどなく今泉に入る。十三湖畔で停車。このパーキングエリアで十分程景色を眺める。清成叔父さんが昔、バスで診察に来た時は十三の湖があったそうだが今は一つになっている。一休み後、小泊道を南下して金木町へ。途中津軽鉄道と二度交差する。

午前八時三十分金木町到着。まず北にある芦野公園に到着。夢の浮橋を見学。散策する。太宰治文学碑、津軽三味線発祥の地をめぐって芦野公園の桜をめぐる。散策後九時過ぎ、更に駅近くの太宰治記念館「斜陽館」に着き駐車、見学する。忘れていた太宰治の生活や育った環境をサーッとではあるが再認識させてもらった。朝早くからかなり大勢の見学者が来ていた。駐車場横の物産店で買い物した後、十時三十分頃、金木町を後にする。最初、町の祭りの日なのか、中学生の鼓笛隊のパレードの後ろにつき低速前進の為、まいつていたら先生が生徒を左につめてくれて我々が先に出る事が出来た。感謝、感謝。

念館「斜陽館」に着き駐車、見学する。忘れていた太宰治の生活や育った環境をサーッとではあるが再認識させてもらった。朝早くからかなり大勢の見学者が来ていた。駐車場横の物産店で買い物した後、十時三十分頃、金木町を後にする。最初、町の祭りの日なのか、中学生の鼓笛隊のパレードの後ろにつき低速前進の為、まいつていたら先生が生徒を左につめてくれて我々が先に出る事が出来た。感謝、感謝。

車力町の、のどやかな田園地帯を一路鰯ヶ沢へ向けて南下する。十三道と言うらしい。高い土手で囲った溜め池をいくつか通り抜け、国道101号の交差点へ出る。

鰯ヶ沢には十一時前後に到着したのが目的地である食事処『じょじょ長屋』を探すのに苦労する。再三道を間違えたあげく、ようやく十一時十五分過ぎ、じょじょ長屋到着。名物じょじょ飯をいただく。紅の色のついたご飯で、小海老や海産物が混ぜご飯のようになっていた。皆さんの評価は上々で好評のようである。十二時過ぎ、十二湖を目指して更に南下する。日本海の青い色が好天の為に明るく輝く。いくつかの海水浴場を通り抜け、深浦町の歴史民族資料館前で一旦停止したが特に見学せず更に先を急いだ。

一時間余り走った後、十二湖の入り口の看板を見つけ左折。山に入る。

白神山地は春の息吹で満ちあふれていた。いくつか湖の回りを散策。最後に青池へ。小散策し、写真撮影する。

ここも観光客（地元の人が多い）がいてそれなりに混み合っていた。地元のリಂಗージュースを買い求める。

午後二時三十分、山上より帰路につく。住路と別の絶景の急勾配のドライブラインを下り岩崎村への短絡路にて日本海岸線の国道101号へ戻る。北上す。

帰路は少し車が混み合ってきたが割りとスムーズに走行出来た。途中「千畳敷」と呼ばれる海岸で小休止、トイレタイムをとる。潮風が心地良い。更に少し海岸線を進み、鰯ヶ沢より右折し、津軽岩木スカイラインへと向かう。途中道に迷ったかなと不安になりながらもうねうねと急カーブを上りつめると岩木山の山頂が間近に見える高原に到着。岩木山の南を巡るように走り抜ける。道沿いの嶽温泉のそば屋のトイレを借りる。名物



なのか混んでいた。汁の香りが旨さを想像させた。残念だが時間がない。目の前にせまる岩木山をバックに写真撮影。岩木神社を越えるところなく下りに入る。一路弘前へ。

市街地に入ると(当日祭りがあった為)急に渋滞する。ホテルまで後数kmの地点より一時間近くかかってホテル到着。チェックイン後歩いて数分の交差点角にある小さな「杏」という店で宴会を開く。津軽三味線を聞かせる店で目の前の数メートルの所で五人の弾き手が代わる代わる、最後は一緒に演奏してくれる。舞台の上で弾くのを聴いたことはあったが目

の前のライブは初めてであった。こんなにも津軽三味線の生の音色が力強く心に響くものとは、と感動する。青森の地酒を心ゆくまで堪能し、会を打ち上げる。

午後八時、三々五々夜の街に出る。大太鼓の音が地の底から響いてきて、たまたま春の「じよっぱり祭り」のパレードを見る事が出来た。ねぶたの行灯や山車も小規模ではあるが楽しむ事が出来た。

その後私自身は、友人と弘前城公園を抜けてそば屋を捜しに出かけた。露天が並び、昔懐かしいオートバイの曲芸の小屋、おぼけ屋敷等があり、びっくりした。大勢の人々が敷きものを敷き、桜の木の下で酒や歌に興じていた。喧噪を逃れ、城の北側へ堀を渡つて出ると街道にも人が大勢集まっていた。結局目当てのそば屋は貸し切り状態でもう一度繁華街へ戻り、とあるそば屋で食する津軽そばもまた美味であり酒とよく合う。

翌日はホテルで朝食後、清成叔父父娘と一緒に行動する。城のすぐ近くホテルより歩いて数分のところに立派な物産センターがあり、そこでねぶたの立派な山車や、津軽塗(漆)や工芸品を見、土産物を物色する。帰りに城の掘端を歩く

と少し葉桜になっている並木が明るい日差しとさわやかな朝の風にマッチしていた。

弘前から青森への国道7号線は整備も良く、小一時間で着く事が出来た。青森ではジャズのかかるそば屋で昼食をとり、名物三角ビルの下で最後の買い物をし、十二時過ぎフェリー乗場へ着く。各車乗船手続きを済ませ午後二時前後に船内へ。それぞれの部屋に落ち着く。帰りは私達と叔父一行が同室で和風の部屋であった。明るい昼の時間帯なので陸奥湾の穏やかな波のしぶきを眺めながらワインを飲み、団らんする。私個人は叔父さんと初めて将棋をさす。○勝2敗。自称五級とおっしゃるがなかなか強い。自分でも守りの薄さを痛感する。少し甲板も散策し、夕陽を眺めレストランにて食事。

午後九時、室蘭港が見えてくる。係りの人に鍵を渡し、部屋を空ける。下船時は流れ解散とし、他二台の方々にご挨拶をして車輛甲板へ向かう。

午後九時四十五分、室蘭港到着。それぞれ楽しかった思い出を胸に、帰途についた。

完



輪西雑感

福 永 純

(福永医院)

六月三日、青空のもと大沢小学校に於いて運動会が行われた。いつも子供達の闊達な様子を見ることは大変喜ばしいことであるが、自分達の頃と違うのは、生徒数が極端に少なく賑やかさに欠けることである。今年六十周年を迎えたこの小学校は、昭和四十年頃は全生徒数千八百人程であったのに対し、現在では百四十二人と年々少なくなっているとのことである。これは少子化に加えて、室蘭の企業不況により輪西周辺の人口の減少によるところが大い。

輪西は室蘭市のほぼ中央にあり、周辺にはこの小学校のある大沢町とそれに続くみゆき町、イタンキ浜に至る東町などを併せて、すり鉢状に広がる丘陵に沿って扇状に市街地を形成している。新日鉄室蘭製鉄所の企業城下町として長年繁栄

してきた町で、昭和三十年代には地域住民も約二万人であったが、最近では五、六千人と激減しており、じつに七割が流失したことになる。

最盛期は、輪西商店街を貫く仲通りは一条、十二条まで多くの人で溢れ、肩と肩が触れ合うほどであったとよく聞くが、今は通る人も疎らでまさにゴーストタウンのようである。多くの商店や飲み屋がひしめき合い、映画館も数件あり、医療の面でも内科、外科、産婦人科など多くの分野を網羅していたが、現在では商店、銭湯、幼稚園、専門学校など廃業していくところが跡を絶たなく、空き地や空き家が増え、随分様相が変わってしまった。

輪西七条の市民会館には、昔、市立病院から出張医が来て地域医療にあたっていたことがあり「その頃からお父さんにお世話になっていたんですよ」と、通算四十五年以上に亘り私の医院にかかって頂いている患者さんが数人いて、毎日の診療の中にも時々その頃の様子をうかがうことができる。

輪西周辺にはたくさんさんの社宅があり、そこと新日鉄正門との間には輪西繁華街が待ち受けており、夜ともなるとそこら

じゅうの路地には毎晩酔っ払いで溢れ、喧嘩による怒鳴り声などが絶えなかった。医院前で額から血を流している人などには、見かねて父が出て行って縫合していたことなど子供心の恐ろしい記憶として残っている。商店街や住宅街としてよりも、ある一面では疲れを癒す歓楽街でもあり、遊郭まがいのところもあったと聞くが、昔の輪西は躍動的でまさに荒々しい町でもあったのだろう。最近ではすっかり静かになってしまったが、たまに往診などで町を回ると、残っている昔のままの建物や町並みからは盛んであった往時が偲ばれることもある。

そんななかで不況によって衰退した町を元気づけようと、商店街のみなさんはいろいろな努力をされているが、なかなか実らないようである。しかし、七月にはワニ祭りが開催され、出店が並び野外コンサートがあり、ほんの一瞬でもこのお祭り騒ぎに何処からともなく人が集まり賑わってくる。それを見ると昔の輪西を思い出し、毎日がお祭り体制で臨んでほしいと言ってみたくなる。

十数年前、日本のシンクタンクの一つである野村総研に室蘭再生のプロジェクト

トがあったそうだが、未だに効果のないところをみると失敗に終わったのであろうか。

輪西が活性化しない理由の一つに、土地の動きが少ない事があげられる。屯田兵時代の土地の所有が今でも尾を引いているとかで、そんなところも改善する必要があるかもしれない。

輪西の活性化委員会が地元の中学生に行ったアンケートでは、大人になった時に輪西に住みたくなという人が九割もいて、その理由で最も多かったものは、若者の集まるような面白い場所がないということであった。企業の不況による影響も重要ではあるが、将来を担う若者が残ってくれない事もっと深刻である。

現在の状況は、それらを考慮した町づくりがなされて来なかったことにも原因がありそうである。輪西は日本で一、二のベンゼン高濃度地域でもあるし、若者にとって魅力のない町かもしれないが、企業の趨勢に拘りなく独自の町づくりをして行くことも肝要である。

今年の春から、輪西の中心にあるニュージャパンとその周辺の建物が解体され、七条公園横から九条に至る広い土地に、

今ある市民会館と鉄の街市場を新築移転する工事が行われている。町の期待を反映するかのような大きな建物が建設中である。これは暮らしの広場計画と言われ、市民会館の舞台ホールや図書館分室なども移転し託児所のような子育て教室や多くの商店も入るそうであるが、若者が少なく人口が激減した今となつては、本当に町の再生に繋がるか心配なところである。

室蘭は、鉄の町とよく言われる。私自身もここに住んでいて有難味を感じる機会があった。以前、ある鉄塊に継ぎ目があるか調べることになり、自分のところの医療用X線装置では出力不足であるため、普段は無縁の構内にある工業用X線装置で調べてもらったことがある。その時の話の中で、船体の亀裂などや鉄の細かい密度の斑などを調べたりすることなど、部外者の私に高度な技術の一端を説明してくれて、身近にこのようなところがあることと同時に、その技術に感心させられた。また、東大のある研究室の同窓会での話を聞いたことがあるが、新日鉄の研究所に勤めている人の言によると、鉄に関しては外国から教えられる事はほ

とんどなく、むしろ教えるほうだと豪語していたそうである。

鉄に関して世界の先端に行く日本の中であって、室蘭も鉄の町とよばれるならば、町を構成する要素の一つに鉄と市民との接点となるものがあっても良さそうである。その一つとして、新日鉄正門前の市民会館移転後の跡地には、鉄の博物館を建ててはどうであらうか。以前から、室蘭に美術館をつくる運動もあるが、設立関係者の努力に反して町の中から望まれる気配もないまま、未だに進展していないので良い機会と思われる。参考になるものとして、島根県安来町にある和鋼博物館が挙げられる。古来より山陰地方に良質の砂鉄がとれたことから、鉄をテーマにした博物館で、美術界では必ず引用される場所の一つであり、国内にはそのような施設が他にないようなので室蘭も取り組む価値がありそうである。

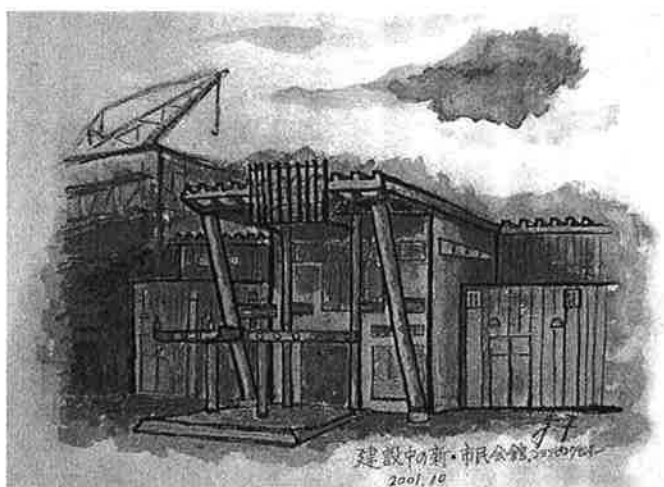
みゆき町の一角には、昔の室蘭ゴルフ倶楽部のゴルフ場であった斜面が残っており、イタンキ浜の断崖に続くことから最近ではパラグライダーの名所になっている。先日も崖に引っかかって消防隊の出勤となったりしていたが、そんなこと

があっても若者達は空を悠然と飛んでいる。いまは雑草で荒れ放題だが、時々ゴルフの練習をしている人もいるようで、これもパラグライダーやゴルフの手近な練習場として再開発の余地がありそうである。

イタンキ浜ではサーフィンも盛んなようで、これらの見えるみゆき町の山頂には、パラグライダーの若者やサーファーが集まることのできる施設も必要になるかもしれない。場合によっては、そこからの眺めを利用してホテルやレストランに発展する可能性もある。これらの人達が町を素通りすることなく、少しでも地域と関わりを持てるようになれば、町の雰囲気も変わって行くのではないだろうか。

若者の集まる環境を考慮しつつ、身近なところから整備をして少しでも再生に向かうことができれば、不況のモデルとなっていた室蘭も再び脚光を浴び、良い人材も集まって新たな町づくりが展開されるであろうと考えたい。

診察室より輪西再開発の工事を眺めつつ、いろいろな可能性を思い巡らせながら複雑な気持ちで輪西の将来に思いを馳せている。



R i o の 女

藤 兼 正 明

(ふじかね内科医院)

大学病院退職前、ブラジルの R i o de j a n e i r o で国際学会が開催されることになり、出席する機会を得た私は、他の医局員の輦轡を買いながらも涼しい顔をして成田発の飛行機で日本を後にした。一月の R i o de j a n e i r o は真夏の季節で、これから始まろうとする R i o のカーニバルの準備のため市内は活気に満ちあふれており、世界有数の債務国との印象とは程遠いものであった。国際学会は市郊外の S h e r a t o n H o t e l を会場として、六日間にわたり脳波、誘発電位などを用いた臨床研究に関する検討が活発に行われていたようであるが、それよりもブラジル女性の外観的解剖的検討に強い興味を抱いた私達は、毎日のようにコパカバーナ海岸や宿泊していたホテルの P r i

v a t e b e a c h 特別学会会場へいそいそと足を運んでいた。

そんな下心みえみえの私達の臨床研究にも一応の結論が認められ、夜のサンバショーや月並みな市内観光にも飽きていた私達は、ある日市内の戦没者慰霊塔を訪ねてみた。同所には前世界対戦中、主に北アフリカやイタリア地区で連合国側の兵士としてドイツ国防軍や武装親衛隊を相手に戦い、戦死したブラジル人兵士達の遺体が埋葬されており、私はそのあまりにも静寂すぎる雰囲気になんぞうらまされた。慰霊塔には目的もよくわからぬまま戦い、遠く異国の地で他界した数百名の精霊達が眠り、その慰霊塔前の広場には、かつての彼らの宿敵であったはずのドイツ軍の 88mm 高射砲が無造作に置かれていた。あたかも精霊達を守るがごとく。砲全体はジャーマン・グレーできれいに塗られてはいたが、製造ナンバーは一九四一年ドレスデン・グループと小さく砲座に刻まれており、ところどころ錆付いたこの高射砲も六十歳の年齢は隠しとせない。

アドルフ・ヒトラーが気まぐれで始めた戦争で、この高射砲はあまりにも有名な

になってしまふ。そもそも、第一次世界大戦で始めて航空機が戦場に登場し、空からの脅威に対して開発されたはずの 88mm 高射砲は、その高性能がために対戦車砲としても使用され、後にタイガー I E 型戦車にも搭載されており、対空そして対地上戦に活躍した。ドイツ砲兵達はこれのたよりになる 88mm 高射砲に自分達の恋人や愛妻の名前を付け親しみを込めて呼んでいた。ガイドの説明によると、今は R i o にいるこの彼女も対戦中はドイツ本国で防空任務に使用されており、終戦後に戦利品としてブラジルへ運んできたという。戦局の悪化と共に日増しに激烈化する B・17 やアプロンカスターなどの連合国爆撃機によるドイツ本国への連日の爆撃、彼らを迎え撃つべきドイツ防空戦闘機部隊の姿はすでになく、上空何千メートルのまるで星くずのような爆撃機を打ち落とすために、ナチス・ドイツ降伏の日まで彼女達は酷使された。祖国ドイツのため、ゲルマン民族のため、そしてヒトラーのために：

第二次世界大戦が終わり約五十五年が経とうとしているが、相変わらず地球のどこかで戦争が起きている。時代も変わ

り飛行機はレシプロからジェット機になり、落とす爆弾もコンピュータ制御で目標に到達。一方、飛来する攻撃機を地上から狙う対空兵器もコンピュータ制御の地对空ミサイルが使われるようになり、人間の感情とは別の世界で戦闘が行われようとしている。戦場でのドイツ砲兵達の経験、恐怖そして祖国に対する愛情により娼婦のように、時には処女のように取り扱われてきた彼女。今は一人さびしく遠くブラジルの地に眠る。

新会員・自己紹介

井上 慶 俊

(大川原脳神経外科病院)



遅ればせながら、七月から医師親交会に入会させていただきました。どうぞよろしくお願い致します。室蘭

市医師会に十七年半もお世話になってい

ながら、今ごろ新会員の自己紹介とは、いささかお恥ずかしい次第ですが、「波久島」編集委員会からの依頼がありましたので、筆を取らせていただきます。

もともと、プライベートな時間に同業の仲間内で集う事を意識的に避けてきた嫌いのある私ですが、本年四月から医師会理事会に出席させていただいて、その席上で事務局の方から、親交会に入っていないのは私だけであるとの指摘を受けた事がきっかけで、入会させていただいたというのが本当のところでは。

私は昭和二十七年生まれ、大樹町の出身です。高校は帯広柏葉で、昭和五十三年に札幌医科大学を卒業（二十五期）しました。脳神経外科学教室（故佐藤修教授）在局中は、王子総合病院や市立函館病院で臨床研修させていただき、また災害外傷部（当時）で救急医学の研修を積みかたわら、解剖学第一教室では渡辺勇一元助教授に、ヒト下垂体腺腫の組織培養のテクニクを教わりました。佐藤教授が急逝された翌年の昭和五十九年に教室を離れて以来、今日まで大川原脳神経外科病院に勤務しています。道内三大学と弘前大学出身のスタッフ九人（うち三

人は関連施設のたまこまい脳神経外科に勤務）とともに、主に脳血管障害、頭部外傷、脳腫瘍の臨床に携わってきました。会員の諸先生には日頃大変お世話になっており、この誌面を借りてお礼申し上げます。

私の趣味ですが、室蘭に來た翌年の昭和六十年に、ヨットとサーフィンの特徴を併せもつセイリング・スポーツであるウィンドサーフィン（ボードセイリング）に出合いました。胆振は道内でも雪が少なく温暖な地域のためセイリングに適しており、洞爺湖や噴火湾といった風光明媚な絶好のセイリング・スポットがあります。風という自然のエネルギーだけで大海原を疾走する爽快感がたまらず、春から秋にかけては、もっぱら風と波のとりこになっています。昭和六十三年から平成元年頃にかけては、室蘭から砂原町までのタンバリンカップスーパレガッタという噴火湾横断レースが開かれたりして、ウィンドサーフィン人口も多かったのですが、最近ではめっきり減ってしまい、胆振地区で現在まで続けているのは私を含めて数名だけとなりました。

平成二年からは毎年、友人の所有する

クルーザーヨット（船室があつて寝泊まりできるヨット）のクルーとして、津軽海峡と噴火湾を舞台にした青函カップヨットレース（函館・青森）、エンルムカップヨットレース（函館・室蘭）に参加しています。また平成五年からは、友人が中心になつて開校した室蘭ジュニアヨット教室の手伝いかたがた、私自身も室蘭港内でのデインギーヨット（船室のない一人乗りヨット）を楽しんでいます。ヨットに興味のある先生、また子供にヨットを体験させたいとお思いの先生は、是非ご連絡ください。

セイリングの出来ない冬の間はスキーを楽しんでいます。学生時代にスキー部（ノルディック部門）に所属していた事もあつて、昔からゲレンデスキーをしていましたが、本格的に基礎スキーを始めたのは平成八年からです。長女と一緒に基礎スキー検定二級に合格したのがきっかけでした。平成十一年には二度目の挑戦で、準指導員検定に合格しました。伊達スキー連盟に所属しており、オロフレスキー場でのスキー教室の講師もしています。シーズン中のホームゲレンデはルッスで、ここ三、四年は十二月から四月

までの五ヶ月間に、ナイタースキーも含めて平均五十日近くスキーを履いています。

というわけで、季節を問わず自然相手のスポーツを楽しむ毎日ですが・・・、月に五、六回の当直もこなして臨床に携わっていますので、今後ともこれまで同様よろしくお願い致します。

新会員・自己紹介

宮 町 敬 吉

（宮町脳神経外科クリニック）



平成十三年七月二日に登別市新生町にて脳神経外科クリニックを開業させて頂きました。私が日鋼記

念病院に赴任いたしましたのが平成一年十月一日ですので、当地の暮らしも十二年に及びます。日鋼記念病院在職中には、多くの先生たちにお世話になりました。

改めて御礼申し上げます。これからは開業医として医師会会員の務めを果たせるよう努力いたす所在でありますので、よろしく願ひいたします。

私は昭和二十八年生まれ、小樽市出身で学生時代まで小樽で過ごしてまいりました。その後、研修医時代には、道内を転々と致しましたが、最終的に室蘭に行き着いた次第であります。小樽市と室蘭市は、歴史のある街であり、街並みや雰囲気も似たものがあります。街の繁栄や衰退の時代も非常に似ております。

小樽に帰省したときなどは日曜日だというのに繁華街の人通りの少なさに驚くばかりであり、昔懐かしい喫茶店を見つけて入ってみると、殆ど客が居らず昔の喧騒は何処にいつてしまったのかと寂しくなり、「大丈夫か？小樽」と呟くことも有ります。但し、皆様ご存知の小樽の観光地として運河沿いや街並みや、今話題のマイカル近辺などは私にとりましてはなじみが無く異境のような感じがします。その賑わいは別物ではあります。室蘭におきましても同じような状況にありますので心情的にも住みやすいというところで気に入っております。

話題が少ないときには趣味の話ということになり、改めて尋ねられると苦しいのですが、例えば高校時代は、美術部に在籍しましたが、「あつ」という間に自分の限界を知らされ、やめたいと思っていましたが、部員が少なくやめる事が許されず続けてしまいました。大学時代は、芸術分野での芽は無いということが経験上解りましたので、一念発起、スキー部に入部しました。ところが、これも「あつ」と「いつ」ぐらいの時間で、またしても才能が無いことを思い知らされましたが、余る力の発散の場として、また健康の為に最後までやり抜く事が大事との一念で続けましたが、本来寒いのは苦手です。卒後は殆ど嗜んでおりません。さて定番のゴルフですが、やってみました。都合七年くらい汗と涙を流しながら、キャディさんの冷たい視線に耐えながらの苦行の連続でしたが、またしても才能が無いことを知ってしまい、元々才能などと言うのもおこがましい練習量の少なさなのですが、振り返ってみれば子供のとき一番苦手なのがピンポンであったわい、ボールの大きさがそっくりではないかと一人合点し、足を洗った次第です。

続いて目にとまったのが、品格に欠けると言われますが、競馬でした。これは、なかなか面白く、周りを見ると華々しく勝っている人も見かけず、スポーツと異なり、ビギナーの苦痛が少ない。身を持ち崩すほどの勝負をする度胸は無い。何が良いといつて僅かな掛け金の為に、総てを忘れ週末の夜を没頭して過ごせるのが良かったわけですが、今回の開業準備等の忙しさでしばらくはご無沙汰しています。そうすると今は、なあんにも無いということになります。本当に何も無い状態で精神衛生上、宜しくないと思われます。もう少し落ち着きましたら、精神の安定の為に、昔の趣味を振り返ろうと考えている今日この頃であります。

脳神経外科クリニックという当地域では初めての施設ですが、リハビリ施設も併せて皆様にご利用頂きます様お願いいたします。

盛岡のロータリー地区大会（四月二十二日）に出席して、南部家の当主と三年後の南部陣屋百五十年の打合わせをしました。

文芸関係では、四月十七日に第十四回平林賞受賞式、七月三十日には芥川賞作家三浦清宏さんと室蘭の古い市街地について、懇談を行なっています。

平成十三年七月には、三市文化交流で上越市に行き、児童文学の杉みき子さん、

近況報告

上田 智夫

上田医院

内科

昨年（平成十一年）末から、正月にかけてはポルトガルに。ゴールデンウィークにはロシヤに。九月にはソウルに行っていました。

メダカの学校（高年者の合唱）では、七月に地球岬、十月には昭和新山で合唱しました。仲間にお誘いした人達は、皆すっかりハマっていますので、先生方も参加なさいませんか。

居多神社宮司花ヶ崎さん等と交流しました。

大岩 昌生

大岩医院

内科

昭和二十四年、縁あって、当地登別市鷺別町で診療所を開設し約五十年になります。

開業当時は長期間無医地区であったので大変喜ばれ、盛業でしたので落ち付く事になり今日まで続いています。

今では私も八十歳を超え 心身共に老齢化し何時まで続けられるか判りませんが足腰の立つ限り頑張りたいと思います。何時頃からでしたか、警察署の依頼で死体検案の仕事を引き受けることになり年間かなりの件数を行って居ります。

家庭では家内と二人で暮らして居りましたが、脳梗塞と転倒して大腿骨折を起こし、現在入院中で現在独居生活です。炊事、洗濯、掃除等何とかやっています。これからの事を思うと暗い気持ちです。医師会等の行事には出来るだけ参加し

たいと思って居ります。

大久保洋平

大久保医院

皮膚科

室医の理事や委員を退任してからは皆さんとお会いする機会がめっきり少なくなりました。自分ではそれ程、長い時間経ていないと思つて居りましたら、この度、編集子から「近況を知らせろ」との名指しがあり、仕方なく締切りぎりぎり報告する気になった次第です。

「お役ご免」を頂いたので自由時間を、あれをしようか、これをしようかと構想を練っていたら一昨年秋に突然発病入院してしまいました。丁度コンピュータ機器の二〇〇〇年騒動の最中に病室で越年、何んにもできない管理生活の三ヶ月でしたがコンピュータも小生も無事でした。実はその後の方がトラブルが多く、三ヶ月余りの入院で全身の筋力はすっかり鈍つて了い、自宅の階段の昇り降りも手摺りに掴まったりハアーハアー息切れしたり、血圧が上がって目まいがしたりで

遂々外出をためらつて了いました。そのため体重が急速に増加、会う人からは「最近肥えられましたね・・・」と皮肉に聞こえるお世辞をいただき、その夜はこつそりと巻尺を腹に当て、体重計に繰り返して上ったり。でもこれらは一向に下る気配なし。ますます動悸、息切れを自覚している日々です。

これでは駄目だと、頭と体力のトレーニングに何が良だろうかと考えてみましたが、パソコンはやたら難しいようですし、それにEメールとやらは勝手に飛び込んで来るみたいで煩わしいし、送る相手もそう多くはないしで止め。結局これまでも遊んできたカメラを持つて外出するのが一番と、ハイテク装置の付いたのを一台買いましたが、これまた小さいデジタルの塊りで、写すのは極めて簡単乍ら扱うのが大変難しい代物です。まるで昔、読んだロシアの文豪の小説の中の登場人物の名前のように何度も何度も使用説明書の頁を遡つて読み直す始末です。幸い今年になって末っ子も結婚しました、孫にはランドセルをプレゼントしたので一応、父親と爺さんの役目は終えました。しかし、あとは・・・だけと云

うのも癢だから「老後用のいいものな
いか？」と模索しているところです。

小生は、まだ、何かをしなければ
いけないのかなあ？

国本 孝夫

くにもと皮膚科医院

皮膚科

昨年（二〇〇〇年）三月二十三日手術
を受けた。

病棟主治医のムンテラは、ステージ
IVAのジャンピングメタ（頸部と腹部の
リンパ節）がある。進行性食道癌では術
後一年以内の死亡は九十%を越え、多く
は平均九カ月です。更に、年齢が四十代
と癌年齢として若いので、もっと早まる
可能性が有りますと、家族に説明してい
たようだ。統計的にみて妥当な説明であ
る。

私自身に、腹部にジャンピングメタが
有った事を、はっきり知らされたのは、
術後一カ月程経過して、病理の結果がで
た後だった。発見が頸部のリンパ節腫脹

だったのだから、自分としても予想して
いたが、やはり腹のリンパ節にも転移し
ていた事を知らされた時は、ショックだ
った。この部位には放射線治療をしてい
ないので、明らかに活動的な癌細胞がい
る事を感じたからだった。

専門外の事では有るが、ジャンピング
メタの存在が何を意味しているかは、充
分把握していた。とても悪性で有る事を
意味している訳だ。出来るだけ早くベッ
ドから起き上がって、可能なかぎり早く
退院したかったのは、命の残り時間の事
を悟り、片付けて置かなければならない
事を思ったからだった。普通、開胸し、
腹もあけられて、更に首も半周切開され、
食道切除や胃の形成術のほか、殆どどの
リンパ組織を取り除く手術を受ければ三
〜四カ月はベッドから起き上がれないと
云われていたが、術後二週間目に私はう
るうろ院内を歩き回っていた。

シスプラチン＋5FUの化学療法を受
け、退院したのは六月十八日だった。こ
の日は色々な記念となる日で、母校の開
校記念日だし、登別のくにもと皮膚科医
院をオープンした日でもある。医院の整
理は弟への譲渡と云う事を入院前から決

めていた事であるが、医院の評価額につ
いては非常に難しく、特に肉親に譲ると
なると、とても厄介なものである。

さらに小生の妻は九年程前から“パニ
ック障害”で、いまだに、治療が定まらず。
医院の処分を委ねる事が出来ない。遅々
として譲渡の確定は進まず、かなり私自
身に焦りが生じた。しかしやっと、来年
一月譲渡するという事で大筋が決まった。
後、もう少しで税理士さんに、全てを任
せられる状況まで何とかこぎつけた。気
がついてみたら、三月二十三日の手術日
は既に過ぎ、退院した六月十八日も過ぎ
てしまっている。六月、盛岡の執刀医の
診察を受けに行った。主病巣部位と転移
のあった部位の再発も、遠隔転移も、い
まだ見られないという事だった。後は免
疫の力を高める様な生活が続けるのが最
良の治療で、色々心配するのは良くない
と言われて帰ってきた。何とか、この一
〜二カ月の間に、譲渡の細部も決定して
しまい、後は極楽トンボの生活を送るつ
もりである。今後の挑戦は、五年生存率
一%打破を目指す事だ。しかし、ちと厳
しい数値である（笑）。

それにしても、術前体重六十五kgか

ら五十kgに体重減少すると、寒さが骨身にしみる事を痛感した。今年の冬は、極力ハワイやグアム、パラオなどで過ごそうと計画している。もし、今後も命が絶えず、生き残る事が出来たなら、何をしなければならぬのだろうか？

小生は、殆んど無神論者であるが、神に訊ねてみたいものだ。自分としては遊び人を選択したいと思っているのだが……

六月十二日～七月十一日までの

スケジュール

斎藤 修弥

斉藤外科医院

六月 十二日(火) 第三回理事會
六月 十三日(水) 室蘭地域産業保健センター運営協議會
六月 十六日(土) 北海道歯科医師野球大会懇親會
六月 十八日(月) 登別市医師協議會
六月 二十日(水) 室蘭管内産業保健活動推進協議會

六月二十一日(木) 日医認定スポーツ医制度研修會

六月二十五日(月) 児童虐待プロジェクトチーム第二回検討會議

會議

六月 三十日(土) 北海道ドクターズゴルフ大会前夜祭

七月 一日(日) 第三十五回北海道ドクターズゴルフ大会(小樽カントリークラブ)

ラブ

七月 二日(月) 日照市医療技術交流員市長表敬訪問

七月 三日(火) 第四回三役會

七月 五日(木) 第二回室蘭地域産業保健問題協議會

七月 七日(土) 看護地域別研修會

七月 十日(火) 第四回理事會

七月 十一日(水) 市立室蘭看護専門学院運営協議會

七月 十一日(水) 日照市医療技術交流員送別會

何とか体が持ちました。皆さんお世話になり有難うございました。

角 哲雄

恵愛病院

精神科・神経科

登別での生活も十年目。単身赴任で週末札幌に帰る生活の為か、どうしても仮の宿という意識が払拭されず、腰が落ち着かなかった。それでも、十年も経つと嫌でも知己が増える。人の輪が確実に広がっていくのが解かる。医師会関係の仕事も増えた。これまで全く交流の無かった先生方と話す機会が多くなったのも嬉しい事である。室蘭市医師会理事としての担当は学校保健。なかなか大変な分野で前任者のご苦労が忍ばれる。

会長から小生に与えられた課題は学校保健におけるメンタルヘルスの充実。難しいが、看過できないテーマであるのも事実。皆様のご協力をお願いしながら、何とか形を作りたい。

趣味のゴルフはシーズン初めから好調で八十台(といってもその後半が多いのだが)が続き、全道ドクターズでは真面目にB・フライングの優勝を狙ったのだが

やっぱり駄目でした。今年のゴルフの課題は切れない事。医師会のコンペにも参加しますのでもよろしく。

原田 一洋

はらだ 外科医院

外科

旧き友、知人は次々に旅立って行く、雀友なく成立しなくなってきた、淋しき限りですね。

今年の六月九日、兄弟七名（♂四名、♀三名）夫婦で合計十四名、奥湯河原の温泉旅館で会を持った。未だ一名も欠けていない、楽しい会であった。翌朝は、マイクロバスの中で滝廉太郎が作曲した「箱根八里」を合唱しながら、芦ノ湖、箱根関所を巡って小田原駅で解散した。

このごろ暇つぶしに、読書とは変な言い方だが、「小説十八史略」（陳舜臣）を読んでいる。孔子、孟子の時代から戦国春秋時代が面白い。

堀尾 昌司

堀尾医院

外科・内科・整形外科

・ 家で初めてグアム島へ行った。白砂のビーチだった。「浮き輪」を借りに子供とレンタルショップへ行った。外人の店員だったので、子供の手前、英語でオーダーした。店員に「サンダル」と言われたので、「私はサンダルまでが必要としていない。なぜなら自分のサンダルを持っているからだ。」と英語を作って得意げにしゃべった。店員が困った顔をした。隣で子供がポツリと言った。「パパ、あの人「3ドル」って言うてるよ。」

・ 「アッペ」で久しぶりに入院した。手術の翌朝、新人のかわゆい看護婦さんが検脈に来了。頻脈だった。超ベテランさんが測り直しに来了。徐脈になった。

・ 脊柱側弯にO.A.が加わり、腰痛に悩んでいる。経験上、腰椎バンドがとても良く効くので腰痛患者に勧めている。

時々「どんなバンドですか？」と聞かれる。腰に巻いたバンドを見せたい衝動を必死に抑えながら、口で長々と説明している。

・ 子供の運動会は晴天だった。成長した我が子の姿を日がな一日目を細めて眺めていた。翌朝、鏡を見たら黒く運動会焼けした顔に笑いジワだけが「白ぬき」になっていた。しばらくの間、外来では笑顔を絶やさない様に努めた。

・ 「桜、猫、電車、93、86、・・・」長谷川式スケールを介護申請の患者に質問しながら、一方で必死に答を暗記しようとしている私。

・ 介護認定審査会の議長に任命された。変形性腰椎症、痴呆など色々なケースを毎回三十例以上審査している。予習作業にもものすごく時間がかかり、腰にしんどい。作業中はいつも「机にハマってやつと立ち上がる」状態になる。近日中に要介護申請をしようと思っている。（要支援・・・）

編集室へのお便り

広瀬 欽也

(十二・十二・四)

図書資料ご寄贈についての御礼
時下ますますご清祥のことと存じ、お慶び申し上げます。

このたびは図書資料ご惠贈賜り厚く御礼申し上げます。

早速、整理保存のうえ、広く市民の方々にご利用頂く所存でございます。今後とも、よろしくご協力くださいますよう、お願い申し上げます。

室蘭市本町二―二―五

市立室蘭図書館

(十二・十二・二)

「波久鳥」二十一号拝読しました。

毎年の事で感謝致して居ります。

年が経るにつれ情報過疎になり、旧交ある先生の死亡又は退職を知り、寂しい思いをして居ります。

皆さんの一層の発展をお祈り致します。

札幌市白石区菊水一条二―三―八

一〇〇五

十二月も残す処僅かで大騒ぎの世紀末

ミレニアムも終わりを告げようとして居りますが、貴会長の運営宜しきを得て医師会及び親交会も御隆昌の様で何よりと慶賀申し上げます。

比度は「波久鳥」二十一号を御惠送頂き誠に有難うございました。世代交代とは申し乍らも良き先輩に恵まれ益々興味深く拝読して居ります。編集の先生方に宜しくお伝え下さい。懐かしい先生方の御訃報に接することが多くなりましたが遥かに御冥福を祈り上げて居ります。

お元気で二十一世紀を迎えられますよう

札幌市中央区宮の森一条

十五丁目一番十五号

小國 親久

(十二・十二・四)

図書資料等ご寄贈のお礼について

時下ますますご清祥のことと存じ、お

慶び申し上げます。

さて、この度は図書資料等を港の文学館へご寄贈賜り、厚くお礼申し上げます。

早速、整理保存のうえ、広く市民の方々にご利用頂く所存でございます。

何分にも、皆様お一人お一人のご協力で成っておりますこの港の文学館でございますので、今後ともよろしくお力添えくださいますよう、お願い申し上げます。ありがとうございます。

室蘭市海岸町三―六―十二

港の文学館

(十二・十二・五)

「波久鳥」お送りいただき有難うございました。編集の方々も大幅に交代されたようですが、内容は益々充実し、その努力の程、察せられます。加藤先生はじめ諸会員の方々の御活躍も伝わり大変懐かしく読ませていただきました。

静岡市大谷三八〇―九二

一方井 卓四郎

(十二・十二・六)

親交会の主な行事

○ 受賞祝賀会及び忘年パーティー

平成十二年十二月八日

於 室蘭プリンスホテル

○ 平成十三年定期総会・懇親会

平成十三年五月三十一日

於 ホテルサンルート室蘭

○ 行楽会

平成十三年七月十九日

於 ビアキャビン エレガ

会 員 異 動

平成12年10月～平成13年10月

年・月	事由	氏 名	医 療 機 関 名
13・2	退会	遠 藤 孝二郎	元遠藤医院（5月に逝去）
13・3	退会	三 村 信 輔	三村病院
13・5	逝去	北 川 正 樹	わかくさ眼科クリニック
13・5	逝去	藤 兼 和 男	ふじかね内科医院
13・5	退会	岩 倉 秀 夫	岩倉医院
13・5	退会	田 中 豊 典	登別中央病院
13・6	入会	藤 兼 正 明	ふじかね内科医院
13・6	入会	鈴 木 啓 弘	鈴木内科
13・6	入会	鈴 木 彩	鈴木内科
13・7	入会	井 上 慶 俊	大川原脳神経外科病院
13・8	入会	宮 町 敬 吉	宮町脳神経外科クリニック
13・10	逝去	齋 藤 光 史	エバーグリーンハイツ室蘭

平成13年10月末現在会員102名

編集後記

何か新しい趣向を、という編集委員会の意向で恒例の座談会を一旦休止し、医療機関訪問手記という形で今回の相互訪問が実現しました。自己紹介や宣伝とはひと味違った内容で、それぞれの医療機関の様子や各先生方のお人柄も覗える内容ではないでしょうか。

会員諸兄のご意見を頂き、来年度の継続を検討したいと存じます。

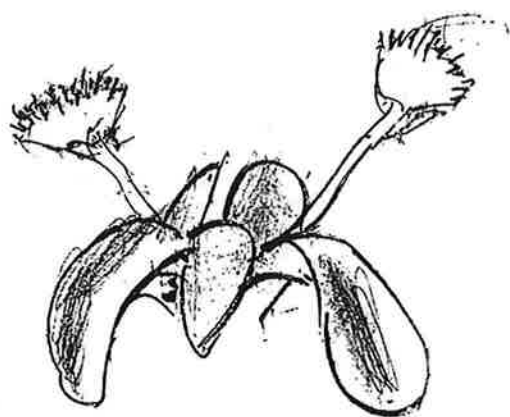
又、自薦・他薦問わず御希望がございましたら編集委員会の方へご一報願います。

諸先生の玉稿を頂き編集作業をする過程で、思わぬテロ事件とその他の報復という事態に世界中が困惑しております。その様な状況の中で、扱いは少ないのですが、非政府組織の医師たちの話を見聞きする機会があります。各種報道や評論家のやや過剰とも思える反応とは裏腹に、彼らの意外なほど冷静で沈着な対応が目を引きまます。

同じ医療に携わる者として、時節に応

じた適切な対応を迫られる立場であるとともに、医療の原点というものを改めて考えさせられる思いも深く致します。来る年が平穏であります様に祈念して。

(開田博之記)



アユハケおむす

「波久鳥」二十二号編集委員

柳	吉	福	松	曾	堀	開	鴨	生	角	齊	三
川	井	永	村	田	尾	田	井	田	哲	藤	村
	大		茂	光	昌	博	清	茂	雄	甲	博
讓	介	純	樹	彦	司	之	貴	夫		斐	通

親交会誌 波久鳥

発行日 平成十三年十二月一日

発行所 室蘭市医師親交会

印刷所 室蘭印刷株式会社